# メサイア・デザイア

きょうげん愉快

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
メサイア・デザイア

【Ｎコード】
Ｎ８５８６Ｘ

【作者名】
きょうげん愉快

【あらすじ】
宗教団体「エスキナ教団」の信者達が自治を行う惑星「エスキナ」
彼らが象徴と崇める神像「プラディナ」に憧れる少年ルエイユは
ある日教団の地下で信じられない物を目にする
神々が争うその水面下で繰り広げられる人間たちの欲深い闘争

これは世界を救う欲望の物語である

こちらは転載元のサイトから移植してきた物です。
パクリとかではないのでご安心ください。

# Prologue

「はぁ……はぁ……」

僕は無心に走っていた。目的地なんてものは全く思い浮かばない。そもそも行くべき場所など何処にもないのかもしれない。でも、立ち止まったら僕は確実にアレに殺される。空を漂うあの漆黒の影から逃げ延びる事が出来るなら何処でも良い。あるかどうかも分からないその場所を、僕はひたすら目指していた。

「はぁ……はぁ……うっ！」

影から光が降り注ぐ。その仄暗い輝きに照らされた近くの家屋が一つ、爆砕した。粉塵と共に大量の瓦礫が僕の元に降り注ぎ、全身に傷を作る。その痛みは、ひ弱な僕を動けなくするには十分過ぎるものだった。僕はもう痛みに疼く身体を押さえながら無様に呻き声を上げのた打ち回る事しか出来ない。誰か、助けて……そう心の中で叫ぶ。その直後、そんな事をしている自分に気付き、情けなく思った。

――ああ、なんて無様。なんて……無力

僕は、あまりにも無力だ。逃げ回っているからではない、弱くても良いと思う。でも、危機に立たされ、顔も知らない”誰か”の助けを身勝手に求める……そんな僕は、この上なく無力だ。

何の見返りもなしに他人を助ける人間など居はいない。誰一人として助けられない僕のことなど、誰一人とて助けてはくれないのだ。そう思い直し、なんとか立ち上がろうとする。しかし、想いに応えるのは更なる痛みだけだった。痛みに耐えられない僕は再び地べた

を舐める。そこに、無慈悲に最後を告げる黒い銃身が向けられた。銃口が鋭い光を放つ。僕は思わず目を閉じ、直後に身体に大きな振動はあったが、どれだけ待っても身体を射抜かれる感覚はなかった。代わりに、心地よい振動が僕を包み込む。

「……？」

目を開くと、そこは大きな掌の中だった。見上げればその手の持ち主は巨大な鋼の騎士、周りは果てしなく広がる……とは行かないが、土煙すら届かない青い空。僕は騎士に護られ、大空を飛んでいた。

騎士の名を僕は知っている。いや、この星において、知らない人間など居ないだろう。エスキナ教団所属大司教用ＶＡ『プラディナ』……この星の正教であるエスキナ教団が所有する人型機動聖像『ヴァルキュリア・アーミーシリーズ』の頂点に立つ平和の守護者。

その最強の聖騎士に護られて、僕は地下シェルターの入り口まで連れて行かれた。僕を降ろしたプラディナは、元凶たる黒き影に向かい勇敢に飛び立っていく。強大な力を持つ悪に恐れずに立ち向かうその姿は震えるまでに美しく、その時の僕にとっては紛れもなく、伝承にのみ姿を残す”救世主”そのものだった……。

その頃からだ、僕が”救世主”という存在に憧れ続けているのは。

# 1―1

『ルエイユ・ゴード、威嚇射撃で”邪神”の足を止めろ！　その隙に切り込む！』
「は、はいっ！」

突然イヤホンから聞こえてきた団長直々の指名に、僕は慌てて返事をする。手元のマニピュレーターに大急ぎでコードを入力すると、神体が大きく揺れた。僕の乗るＶＡ『プラッテ』が射撃を開始したのだ。プラッテはレーダー上の赤いマーカーに対し、一定の距離を保ちつつ周囲を飛び回り、至る所から弾丸の雨を降らせる。
無重力の宇宙空間とは言え、これだけ高機動で動き回るとＧが多少苦しい。しかし、僕にはこれ以外の取り得がない。戦場で役に立つ為に必然的にこれをやり続け、今ではすっかり慣れてしまった。それでも”邪神”には傷一つ付けられないのが悲しいところだが。

『よし、今だ！　突撃する！　全騎、続けぇ！』

団長の号令に合わせて仲間達が一斉に”邪神”に飛び掛った。ちなみにこの時の「全騎」に僕は含まれない。後方支援担当である僕の役目は、仲間の突撃まで足止めするところで終わるのだ。
お陰で戦場において被弾する事は滅多にないが、その分戦果も挙げられない。もっとも、僕達”教会騎士団”は一度でも戦果を挙げれば戦いは終わりだ。僕らの敵は目の前の”邪神”と伝承に記される存在『カルマリーヴァ』しかいないのだから。そう考えると、僕達はこれまでに一度でも戦果を挙げたことはないのである。

『こちらミルニア騎！　被弾しました！　中破につき、脱出します！』

『こちらラスティ騎！　同じく脱出です！』
『団長、自軍残存戦力が４０％を切りました！　敵戦力、依然変化なし！』

そして今日もまた、いつもとさして変わらない状況が展開されていく。きっと今日も戦果を挙げられないまま戦いが終わるのだろう。そろそろ団長の全体命令が下る。

『……止むを得ん。周辺住民の避難は既に完了している、撤退だ！』

なおも暴れ続ける”邪神”に対して、僕達に出来る事はあまりに少なかった。現場に駆けつけても、せいぜい周辺住民の避難まで時間を稼いで逃げるだけ。まがりなりにも神という圧倒的な存在の前に、僕達は悲しい程無力だ。自治権獲得の折はあれほど希望に満ち溢れていたこのエスキナ教団自治惑星『エスキナ』には、今や光明の片鱗すら見えない。エスキナ自治開始より早2年、世界は”救世主”が必要とされていた……。

「……ふぅ」

思わずため息をついてしまう。無機質なコックピットから出ると、そこは同じく無機質な格納庫。いつ見てもまったくもって教会らしくない建物だと思う。この区画に入れるのがＶＡの操縦をする騎士と整備班だけなのはその所為である、と僕は信じて疑わない。ここに居ると気が滅入って仕方がない、早々に着替えをして部屋に戻ろうかなどと考えながら、ふと時計を見る。

「……正午、か」

これは先に昼食だな。そう思い直すと僕は売店の方へと足を向けた。すると

「ルエイユ、これからメシか？」

売店に向かう道の途中で声を掛けられる。声の主は同じ部隊に所属する同期生で、名はラスティ。先程の戦いで神体が中破した、と聞いていたが。

「ラスティさん、神体の修理しなくて良いんですか？」

「ああ、神体なら整備班に預けてきたよ。思った以上に損傷が激しいみたいでな。修理も兼ねてオーバーホールすることになった」

随分と酷くやられたらしい。彼の神体は近接武器を複数搭載した白兵戦仕様、間近で”邪神”の攻撃を受けたのなら中破で済んだだけでも奇跡と言って良いだろう。

「そんなこんなで手が空いちまったんだよ。メシなら食堂で一緒しようぜ。マザーについてちょっと小耳に挟んだ事もあるんだ」

「ハルコ様について？」

噂好きのラスティさんはよくこう言った話を持ち込んでくる。そして情報料と称して食事を奢らせる、と言う半ば情報屋の様な人だ。そして僕を釣る餌には大抵大司教、マザー・ハルコについての話題を持ってくる。まぁ、毎回買ってしまう僕も僕なのだが。

「……分かりました。今回もA定食で良いんですか？」

「いや、今回の話は結構価値があるからな。B定食にデザートも付けてもらうぜ」

彼は決して値段に見合わない情報は寄こさない。ソースのはっきりしない噂話には食事も要求しなかったり、逆に重要な情報なら今の様に普段より高いランチを要求したりと、自分の中に明確な基準があるようなのだ。今の口ぶりからして、今回は随分自信があるらしい。多少出費は厳しいが聞く価値はあるのかもしれない。

「じゃあ、手持ちじゃちょっと足りないので先に行っててください。部屋からお金取って来ます」

「ああ、じゃあ食堂でな」

そういうとラスティさんは食堂の方に向かい歩いていった。僕もなるべく早く行かなくては。進行方向からUターンし、自宅のある居住区を目指して僕は歩き出した……。

「よーし、こっちだ！　オーライ、オーライ！」

居住区と格納庫の間に位置する商業区。そこでは巨大なクレーンがコンクリートの塊を持ち上げていた。横にあるのは似たような塊が積もった瓦礫の山。この辺りには確か雑居ビルがあった、と僕は記憶している。

「……そっか、今回の攻撃で壊れたんだ」

今日の”邪神”の攻撃場所はこの商業区の上空。戦闘はそう長くはなかったが、もしかしたらあの時の流れ弾がビルに当たったのかもしれない。”邪神”の放つ光は雨の様に降り注ぎ、無差別に全てを破壊していくから。

そう、無差別。”邪神”の攻撃にはいつも統一感がない。最初に

襲われたのは、軍事施設。エスキナ付近の防衛軍が突如攻撃を受け、成す術なく壊滅に追いやられたのは記憶に新しい。平和の神”ドゥキナ”の預言を受けた教団の教祖、ジギアス・イェイス様が予め用意したＶＡがなければ今頃どうなっていたかも分からない。

次は居住区だったか。こちらの時は既にジギアス様の力は周知の事実だったので、ＶＡの介入や住民の非難もスムーズに進んだ。人的被害も最小限に留まり、これを機に教団への信仰を決めた人間も少なくなかったらしい。

そして、第３の被害は無人の工業区だった。この時の”邪神”は攻撃が激しく、人的被害はないものの経済への影響は甚大だったそうだ。しかもここが狙われたという点から「”邪神”は人間を狙っている」という当時の説が完全に否定され、謎が更に深まる事と相成った。結果今なお”邪神”の目的は全くの不明で「無目的で無差別な破壊行動」と言うのが定説になっている。

だが目的が分からなくても最終的な結論は一点に集約する。”邪神”を倒さない限り救世はありえない、と言うことである。そこまで分かっていて未だヤツを生かしているのは、未だふさわしい者が現れないからだ。”邪神”を打ち破る程の力を持ち、人々に祝福されるにふさわしい人物が。ヤツが現れてから今に至るまで、世界は”救世主”を求め続けている。だが、僕は確信していた。その人物こそがプラディナを駆る大司教、マザー・ハルコであることを……。

「お待たせしました……あれ？」

「よう、ルエイユ。遅かったな」

部屋に戻って数枚の紙幣を財布に忍ばせた僕は、食堂の席を見回す。窓際の日の当たる良い位置に陣取っていたラスティさんの周りには、数名の同席者が頭を並べていた。

「コイツらも話が聞きたいんだってさ。一人で四人前も食えないから、皆で割り勘して払ってくれ」
「はぁ……」
僕は席に着きながら間の抜けた返事をするしかなかった。目の前に居る人間はラスティさんも含めて四人。つまりこの三人と割り勘をする訳だが、そうなると僕の支払い分は予想の四分の一になる。
「それなら別に部屋に戻らなくても払えたのに……」
出費が思ったより少なくて済んだのは喜ばしいが、無駄に歩かされた分の損がその喜びを掻き消していた。こういう時、人間というヤツはマイナスの方にばかり気が行ってしまうのである。
「いやぁ、俺も驚いたよ。思ったより皆食い付きが良くてさ」
ラスティさんの言葉に僕は少し驚いた。ハルコ様の知名度は実際のところさして高くはない。最強のＶＡの操縦者である事は周知の事実だが、注目されるのはもっぱらＶＡの方だからだ。皆、彼女の事など精々生体コア程度にしか考えていないと思っていた。
もしかしたら、この人達もハルコ様のファンなのだろうか。その答えは、情報を買った仲間の発言ですぐに分かった。
「そんなことよりラスティ、早く教えてくれよ。俺達が『ラグディアン』に乗れるかも知れないってどういう事だ？」
「え？　ハルコ様についての情報じゃないんですか？」
周りの仲間から出た言葉に僕は疑問の声をあげる。確かラグディアンとはプラッテより上位に当たるＶＡで、司教クラスの騎士が扱う神体、と聞いている。少なくともハルコ様と関係がある話には全

く思えなかった。口々に問い詰める僕達に「まぁまぁ」などと声を掛けながら、ラスティさんは僕達を両手でなだめる。

「落ち着けって。どっちにも関係してる話だからさ……ルエイユ、今マザーが何をしているかは知ってるよな？」

「ええ、確か今は惑星マーズで”眷属”の最終防衛ラインを護ってるはずです」

僕達の敵は”邪神”だけではない。世界には他にもう一つ、恐ろしい化け物が存在する。彼らは”邪神”とは違い、ただひたすらに破壊をし続けるこの世で最も純粋な悪意の塊だ。撤退も保身も行わない、恐らく理性といった物が一切ない代物。”邪神”の瘴気に当てられて生まれたとされる彼らを、僕達は”眷属”と呼んでいる。

「そうだ。あそこが突破されるとエスキナを始めとする多くの人が住む惑星に”眷属”が来ちまうからな、基本マザーはあそこを動けなかった。それがな、最近やっとあそこの防衛部隊もラグディアンの操縦に慣れて来たらしいんだ。マザーが戦わなくてもある程度他の連中だけで”眷属”を抑えられるレベルまで戦力が増強してる」

「へぇー、やっぱお偉いさん方は違うなぁ」

ラスティさんの情報を聞いて周りの人々は口々にそう部隊を褒め称えた。だが、僕にはそれが逆に疑問にすら思える。マーズに配備された防衛部隊と言えば、エスキナでの戦闘で優秀な成績を収めたエリートのはず。最新鋭とは言え、ラグディアンもプラッテと同じ機動神像だ。それが慣れるのにごく最近までかかったという。それ程までに操作感が変わる程、劇的に違う神体だとでも言うのか。

「で、だ。損傷が少なくなればその分パーツの余剰も増える。そのままパーツが集まれば……」

「……新しい神体が造れる？」

僕の呟きにラスティさんは指を突きつけながら「それだ」と言った。そして今度は他のメンバーの方に向き直り、

「お前らの知りたい情報はここから。その新しく製造したラグディアンなんだけどな、ごく少数ではあるんだが今度、俺達の部隊に回されるらしい」

そう言って彼らにも僕に対してと同じように指を突き出した。それと同時に話を聞いていたメンバーがどっと沸く。まるで既に自分が乗る事が決まったかの様だ。

「あの、それでラスティさん。それとハルコ様に何か関係が？」

すっかり盛り上がってしまった周りを他所に、僕はラスティさんに話の続きを促す。今のままではここに来た意味が全くないからだ。全員分配備されるならともかく、ごく少数なら恐らく騎士は優秀な数名の中から選ばれるのだろう。万年後方支援の僕にはなんら関わりのない話である。それよりも防衛部隊の戦力増強で戦わなくともすむ様になったハルコ様がどうなるのか、そちらの方が余程気になる。

「ああ、ちゃんと続きがあるって、ルエイユ向きのヤツがな。戦わなくなったマザーの今後……だろ？　顔に書いてあるぜ」

流石ラスティさんといったところか、人が求める情報が良く分かっている。つくづく商売上手な人だと尊敬の念でいっぱいだ。僕もなんでも良いからこの位の才能が欲しいものである。

「マザーはな、今このエスキナに向かってる……ラグディアンのパイロットをご自分で選定したいんだそうだ」
「！　それって……」
一瞬思考が混乱してしまう。いや、本当は答えなんてすぐに出ていた。だが、そんなはずはないと無意識に否定して、頭の中で情報を組み直して、考えて、そして出した答えは一緒で……今尚まさかと思いながらラスティさんの方を見る。彼は余裕を感じさせる微笑んだ表情のまま、頷いた……。
「選定されるのは俺達”教会騎士団”……つまり、俺達はマザーと手合わせ出来るかもしれないってことだ」
「一週間、か……」
少し湿った掛け布団の上に横たわりながら、僕はそう小さくぼやいた。マーズからエスキナまで移動するのに大体そのくらい掛かる。ラスティさんはそう教えてくれた。この情報を彼が手に入れたのがいつかは分からない。仮に2、3日前にハルコ様がマーズを発ったのなら、大体あの方の到着は5日程先という事になる。
「待ち遠しいなぁ」
今から胸が躍り始める。あと5日、それだけ待てば憧れのハルコ様に会える。憧れのハルコ様と手合わせ出来る。憧れのハルコ様の選定が出来る……
「いや、違う違う！」

どうやら浮かれ過ぎて頭が混乱しているらしい。選定されるのは僕達ではないか。それに、実際は戦うかどうかも分からない。選定の方法はまだ決まっていないのだから。

「少し落ち着こう……」

僕は気持ちを切り替えるべく、ベッドから起き上がってデスクに向かった。その上に設置されたパソコンを開き、データバンクを開く。ラグディアンの情報を調べておこうと思ったのだ。僕達などを？かに腕の立つ防衛部隊すらも困惑させる程の機体……一体どんな物なのかが気になった。程なくして情報を発見した検索エンジンが、その詳細を画面に映し出した。

「これは……！」

それはさながら物語に出てくる勇者の様だった。全身に鎧を纏った守護者の名に相応しいその出で立ちに、僕は驚愕を覚える。鎧の継ぎ目は全て関節なのだろうか？　だとしたら、プラッテと比べて段違いに稼動部分が多いという事になる。

そもそもプラッテはそういった部分を極力廃して作られている。稼動部分が多くなればその分操作も多くなり、騎士の操縦が複雑になるからである。その為、プラッテには最低限の稼動部分しかなく、何処かブリキの人形のような動きになってしまうのだ。だが、このラグディアンは違う。ほとんど人間と変わらない程の稼動部分を備え、機械とは思えない程の柔軟性を持っている。これでは量産が出来ないはずだ、必要なパーツが多すぎてとてもコストに釣り合わない。しかも、見ればこの神体は換装騎である。騎士の好みに応じて武器の付け替えが出来るのだ。つまり、自分の得意分野に合わせて神体をカスタマイズしなければならない。

「エリートの騎士が手こずる訳だ……」

ＶＡに通常取り付けられる白兵戦用の武装もさることながら、遠距離用の銃器もかなりの種類がある。また、武装の代わりに機動性を高める補助ブースターを取り付ける事も可能らしい。騎士の力に応じて千差万別の戦術を生み出す事が出来る。このレベルの神体が増産されたのなら、うまくすれば部隊の戦力は跳ね上がるだろう。

だが……

「これだけの戦力、どうして防衛に留めるんだ？」

もっと早い段階からこの神体の増産を進め、操縦に慣れた騎士を集めれば”眷族”を駆逐する事も出来たのではないだろうか？“眷属”は単体ではさして大きな力は持たない。そこそこの腕があればプラッテでも十分応戦可能だ。それこそ僕でも倒す事が出来る。彼らの武器は数なのだ。だが、逆に言えばこちらも数さえ揃えれば奴らを一掃する事も不可能ではない……少なくとも、僕はそう思っていた。

「いくら複雑な機構でもラインを大量に作れば量産だって出来る。なのにそれをしないのは、何か理由がある……っ！」

思考をかき乱すようにポケットに振動が流れる。騎士に支給される通信器、その呼び出しだ。有事にはこれで召集がかけられる。僕は急ぎ通信器を取り出し、器のような受信機に耳を当てた。

「こちらルエイユ・ゴード司祭」

「ゴード司祭、急ぎ格納庫に集合せよ。”邪神”が出現した」

「またですか！？」

”邪神”がこれ程絶え間なく出現するのは前代未聞だ。普段は多い時でも週一度程だと言うのに……。

「原因は不明だが事実だ。先程の戦闘で破損した神体が多い、今回はお前にも前線に出てもらうぞ」

「……！　分かりました。すぐにそちらへ向かいます」

僕は通信器のスイッチを切ると、パソコンを閉じて部屋を飛び出した。僕に前線へ出ろとの命令が下ったのは初めてだ。訓練で周知の事実となっている事だが、僕は白兵戦の才能がはっきり言ってゼロだ。兎に角剣という武器を使うセンスに欠けているらしい。本来白兵戦を主とする騎士団にはあるまじき話だが、今までは対Gテストでそこそこの成績を残していた為なんとか後方支援として残っていた。団長は当然その事を知っているはず、それでも僕にこんな命令をしたという事は……

「本当に危険な状況なんだ。それこそ、騎士が全滅しかねない程……」

幸い、今こちらにはハルコ様が向かっている。あと5日、その間だけ耐える事が出来ればエスキナの安全は確保出来る。

「なんとか、それまで保たせないと……」

ハルコ様が待ち遠しい理由をもうひとつ増やしながら、僕は居住区の路地を駆け抜けて行った……。

# 1―2

『神体が思う様に動かない！　このままじゃ……うわあぁぁっ！』

通信から聞こえてくる悲鳴。僕は大急ぎで通信の主に近付くと、神体と”邪神”の間でシールドを展開した。間髪入れずに断続的な衝撃が僕を襲う。久しぶりに受ける振動に、一瞬身体のバランスを崩した。

「いたた……ミルニアさん、大丈夫ですか！？」

『ああ、なんとかな。すまないルエイユ、助かった』

邪神から放たれる光の雨が止んだところを見計らい、庇った相手……ミルニアさんに呼びかける。どうやら被害は最小限で済んだらしい。慌てて飛び込んだ甲斐があったという物だ。しかし、その割にはミルニア騎の足取りがおぼつかない。推進系に何らかの異常が発生している事は明らかだった。何故かを考える内、先の戦闘で聞こえた通信を思い出す。

「ミルニアさん、もしかしてさっきの戦闘の……」

『……目ざといな。駆動系の優先して修理してたらこのザマだ、まったく情けない』

ミルニアさんは僕達の部隊では一、二を争う白兵戦の達人だ。こうも簡単に追い込まれる訳がないと思っていたが、この言葉で納得がいった。確かミルニア騎は中破、と聞いている。にも関わらずこの短時間での連戦である、修理が追いつかないのも無理はない。この状態では戦闘の続行は難しいだろう。

「ミルニアさん、ポジションを交代しましょう。僕が代わりに前衛に出ますから、ミルニアさんは後方支援をお願いします」
『馬鹿、お前白兵戦の訓練は万年赤点だろうが。わざわざやられに行く様なモンだぞ！』
「それでも誰も居ないよりはよっぽどマシです。このままじゃ”邪神”の侵行を許す事になる。騎士の名に賭けてそれだけは絶対に阻止しないと」

護られるだけでは騎士になった意味がない。僕は人を護る為、騎士になったんだ。今までは僕よりも強い人が居たから、それを助ける事で使命を果たしていられた。だが、今は違う。僕が戦わねばならないのだ。

「大丈夫、なにも死にに行く訳じゃありません。生き残る為に戦うんです」

それだけ言って、僕は邪神に向けて飛び立った。ミルニアさんが後方から通信を送っているが、気にしない。僕を心配してああは言ってくれたが、あの人も状　況は十分理解しているはずだ。だから、きっと分かってくれる。それよりも今は……

「”邪神”……」

久しぶりに間近で見る漆黒の塊。闇をそのまま寄せ集めた様な身体の中心には目玉と思われる赤い光が漂っている。手足はない、あの赤と黒こそがヤツの武器にして防具。漂う黒はあらゆる攻撃を無力化し、放たれる赤に撃ち貫かれた仲間は数えきれない。

「レールガンをC調整に変更」

僕の声に反応してコンピュータがレールガンの出力を変更する。先程までが中距離支援用のB調整、今設定したのは長距離狙撃用のC調整だ。ヤツに生半可な　牽制など意味はない。一撃であの霧を貫き、内側にあると思われる本体に当てなければダメージが通らない、というのが今までの調査結果である。

本当は刀剣類を使うのが一番良いが、生憎僕はそういった物がまるで使えない。書き換えを確認し、レールガンを前方に構える。

「ターゲットロック……うわっ！」

照準を合わせて引き金を、と思ったところで光に遮られた。”邪神”の攻撃だ。まだ距離があるから他の神体を狙うと思ったのだが……

「予想以上に前線の神体が少ないんだ」

どうやら悠長に狙いを定めている余裕は無さそうだ。相手はかなり大きいし、ノーロック射撃で挑んだ方が良いか。その為にはもう少し距離を詰めなければ。　僕は一旦神体を止めると、接近の機会を窺った。

「……今っ！」

“邪神”から光が見えた瞬間を見計らい、ブースターを噴かす。光は僕の真横をかすめて虚空へと進んで行った。これですぐに再攻撃は出来ないはずだ。その隙を　利用して一気に距離を中距離詰める。しかし、”邪神”はそれに合わせるかの様に瞳を正面に向けて来た。

「っ！　なんて旋回速度だ」

悪態をついたところでもう遅い。瞳は既にうっすらと輝き始め、間もなく攻撃が放たれる事を示唆していた。シールドを展開しようかとも思うが、先程の攻撃でシールドのエネルギーはフルチャージ時の３０％まで低下している。こんなエネルギーじゃあ”邪神”の眼から逃れる事は出来ない。だが、他に方法など……そう考えた瞬間、急にフッと頭が軽くなる様な感覚に襲われる。そして同時に思いついた事を、小さく呟いていた。

「いや……避けよう」

言い終わるや否や操られる様に動き出す僕の腕。指先が自分も見た事もない様な動きをして、プラッテを操作していく。それが終わると、間もなく”邪神”の眼から無数の光が降り注いだ。驚きのあまり目を閉じてしまうが、小さな衝撃がいくらか来ただけで、大きな被害は感じられない。揺れが収まると、僕はすぐさま被害を確認した。

「被害状況は？」

『脚部駆動モーター破損。後退を推奨します』

「進言を却下します」

コンピュータが導き出した指示を無視し、僕はブースターを再び点火する。その迷いのない動きに、まるで他人の操縦を傍から見ている様な錯覚に襲われた。確かに、宇宙空間に居る以上、足がなくとも移動には困らない。場合によっては蹴り等に使えるので無用の長物という事はないかもしれないが、ただでさえ稼動箇所に乏しいプラッテではあまり役には立たないだろう。それは自分でも理解できる。だが、それを僕が考えるまでもなく、僕は歩みを進めていたのだ。そして今も、集中されつつある”邪神”の攻撃をことごとく

かわし、着実に距離を縮めていた。プラッテと”邪神”の間は、ついに数十センチまで迫る。僕はプラッテの腕を操作し、レールガンの銃口を”邪神”の身体の中に押し込んだ。腕の負荷を見るにどうやら質量はあまりなかったらしい、ずぶずぶと銃口が黒い影へと埋まっていく。そして……

「……発射」

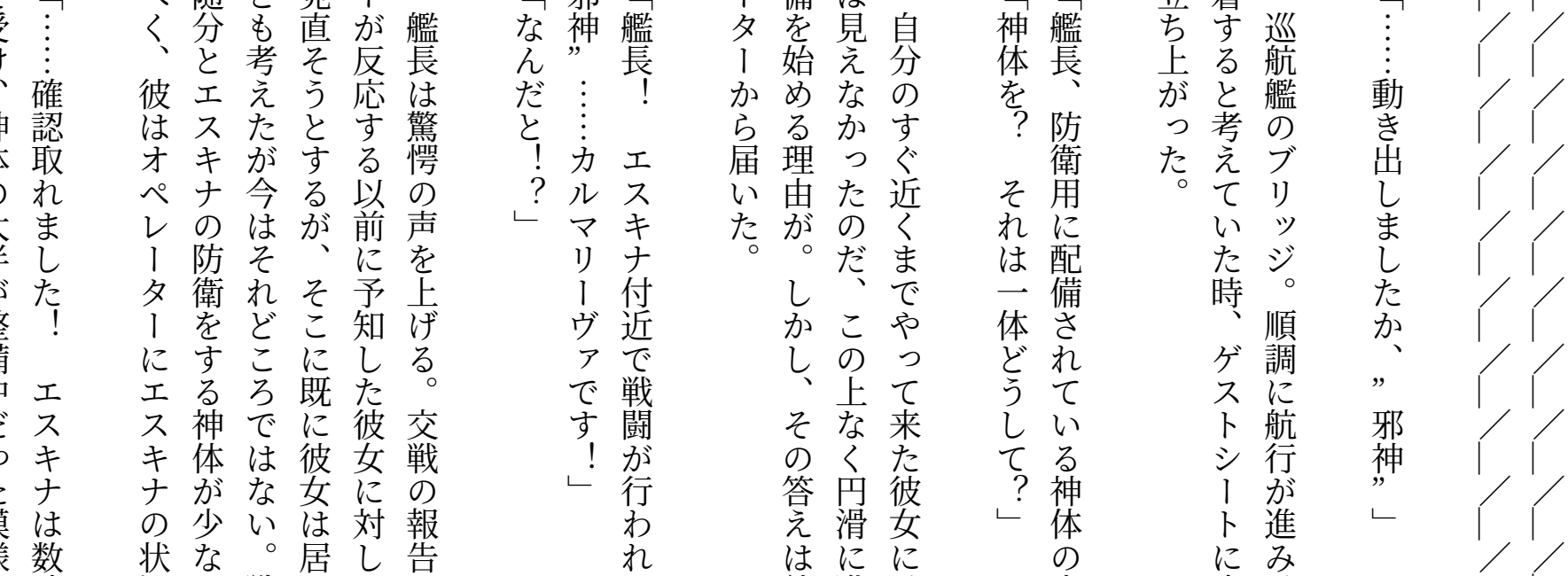
レールガンから光が放たれた。凄まじい衝撃が神体を襲い、コックピット内をアラート音とレッドランプが埋め尽くす。腕部がC調整の威力と、ゼロ距離射撃による反動に耐え切れないのだ。しかしそれを気にする事もなく、僕はひたすらに照射を続けた。この攻撃、危険を伴う分威力も期待出来る。プラッテの火力を考えればこれ以上ない威力が出るはずだ。その予想通り、”邪神”を覆っていた影には大きな穴が空き、内側が僕の位置からだけ見えるようになった。初めて見る”邪神”の本体。一体どんな不気味な化け物が隠れているのかと内部を暗視モードで観察する。

「……え？」

黒い影の内側、そこにあったのは”眷属”の如き怪物でもなく、増してや神々しい神などと言える存在などでは決してない、まるで鎧の様な金属の塊。僕はソレに見覚えがあった。構造はまるで違うが、デザインがソレを彷彿とさせる。

「あれは……ＶＡ？」

初めて見る”邪神”の本体は、先程データバンクで調べたラグディアンによく似た神体だった……。



「……動き出しましたか、”邪神”」

巡航艦のブリッジ。順調に航行が進み、誰もがエスキナへ無事到着すると考えていた時、ゲストシートに座っていた彼女はそう呟き、立ち上がった。

「艦長、防衛用に配備されている神体の出撃準備をしてください」

「神体を？　それは一体どうして？」

自分のすぐ近くまでやって来た彼女に、艦長はそう尋ねる。彼には見えなかったのだ、この上なく円滑に進むこの航海に、戦いの準備を始める理由が。しかし、その答えは彼女ではなく、艦のオペレーターから届いた。

「艦長！　エスキナ付近で戦闘が行われています！　識別コード”邪神”……カルマリーヴァです！」

「なんだと！？」

艦長は驚愕の声を上げる。交戦の報告にではない、それをレーダーが反応する以前に予知した彼女に対してである。再び彼女の顔を見直そうとするが、そこに既に彼女は居なかった。一瞬、探そうかとも考えたが今はそれどころではない。戦況を見ると、報告に比べ随分とエスキナの防衛をする神体が少ないのである。原因を究明すべく、彼はオペレーターにエスキナの状況を確認させた。

「……確認取れました！　エスキナは数時間前にも”邪神”の襲撃を受け、神体の大半が整備中だった模様。全戦力の４５％程しか出

撃していない様です」
「艦に出撃できる神体は何騎ある！？」
「護送中のラグディアンは武装が出来ていないので出撃不可能、配備されているプラッテはエネルギーチャージに3分掛かります……いや、待ってください！　一騎発進シークエンスに入りました！」

オペレーターが慌てた様子で発進しようとする神体の情報を調べる。無理もない、配備されていた神体にはエネルギーが入っておらず、そのままでは発進出来ない。有事の際は3分間艦の装備で防衛を行い、その間に急速充填をする仕様となっているのだ。こんなタイミングで発進を行える神体など、少なくともこの艦には配備されていないはずだった。
オペレーターは格納庫の確認を行う。番号を照らし合わせるとどうやら件の神体は七番格納スペースに格納されていた物である様だった。それだけ聞いて、艦長は総てを納得した。

「七番、発進を中止しなさい！　出撃命令は出ていません！」
「……いや、許可する」
「艦長！？」

艦長の意外な言葉に今度はオペレーターが驚愕した。いくら現地に何騎かの神体が居るとは言え、たった一騎で戦況を変えようなど馬鹿げている。しかし、その上で艦長はその神体の出撃を許可するという。彼には見えているのだ。そんな常識を覆す、その神体の力が。

「準備が完了し次第我が隊も向かいます。それまで、どうかご無事で」
『了解しました。それでは、お先に』

艦長の呼びかけに応えたのは女の声だった。それを聞きオペレー

ターは思い出す。この艦に乗る唯一にして最強の女騎士を。

「艦長……七番に格納された神体とは、まさか……？」
「……我々は運が良いのかもしれんな。現行騎最強と言われるＶＡの雄姿を、こんなにも間近で見られるのだから」

　カタパルトが開くと同時に、金色の神体が飛び立つ。格納庫には凛とした彼女の声が響き渡った……。

『ハルコ・オリハラ、プラディナ、出撃します！』

｜／｜／｜／｜／｜／｜／｜／｜／｜／｜／｜／｜／｜／｜／｜／
｜／｜／｜／｜／｜／｜／｜／｜／｜／

「どうして”邪神”の中にＶＡが……ぐっ！？」

“邪神”内部の様子を見ていると、突如強烈な衝撃が神体を襲った。揺れの具合からしてごく近い位置で爆発が起こったのだろう、そう考えた僕は神体の状況を再びチェックする。

「被害状況は！？」
『左腕部レールガンがオーバーヒートしました。撤退を推奨します』
「っ……推奨行動に移ります」

　止むを得ず僕は転進し、撤退の準備を始める。しかし、”邪神”もそう易々とは帰してくれない。再び光を雨と降らせて、僕の神体を追い詰める。正直、逃げ切れる様な状況じゃない。爆発のダメージや片腕の欠損によるバランス悪化で、ただでさえ神体は推進力を大幅に失っている。直進すらままならないのに、その上”邪神”の猛攻だ。足を止められるのに、そう時間は掛からなかった。

「!?　うわぁぁあっ!」

今度は背部からの衝撃。コックピット内のレッドランプが今までとは比べ物にならない程増える。見飽きたCAUTIONの文字の下には『ブースターの破損』と表示された。推奨行動は撤退から脱出に切り替わる。

「脱出って、今出るのは自殺行為だよ……」

コックピットはそのまま脱出ポットになっているので、一応外に出る事は出来なくもない。しかしポットは低視認性に優れる代わりに速度の出ないガス推進。そして外は”邪神”による攻撃の雨、雨、雨。装甲の薄いポットでは一発当たっただけでも消し炭となってしまう。まだ一応シールドが残っていて、慣性で移動している神体の中の方が安全に思える。

「とは言っても……っ!?　長くは保たない……」

動きが止まったのを良い事に、”邪神”は僕に執拗な攻撃を仕掛けてくる。シールドを極小で展開し、受け流す形で防ぐ僕だが、それでもエネルギー残量はみるみる内に減少していく。ついに残量がゼロになり、更に防いだ光によって残された右腕も吹き飛ぶ。

「……万策尽きたかな」

正真正銘達磨になってしまった神体。無情にも”邪神”はそうなってから再びその瞳をこちらに向ける。

「いや、胸部にビーム砲が付いてるだけだったかな……」

自分でも呆れる程呑気に呟く。死を目前にして逆に落ち着いてしまったのだろうか。僕はあまりにも客観的に、死に行く自分を見つめようとしていた。”邪神”が再び光を放とうと瞳を輝かせる。ただただ貫かれるのを待とうとする僕の横目を、光線とは違う、しかし眩い何かが通り抜けた。そしてそれを視認したのとほぼ同時に、目の前のモニターから”邪神”の姿が消滅する。

「いや、消えたんじゃない……まさか、弾き飛ばした!?」

レーダーには随分と距離の離れた”邪神”の機影。光が飛んできた方向から考えて、衝突の勢いでそのまま飛んでいったとしか思えない。そしてビリヤードよろしく、先程まで”邪神”が居た位置には、それが君臨していた。

燦然と輝く金色の装甲、守護者の象徴たる大型のタワーシールド、そして正義を司らんが為に構えられた剣。あらゆる悪に立ち向かい、そして打ち破ってきた歴戦の勇士が、今再び僕の前にその姿を見せた。

「……プラディナ？」

その姿に、僕は通信という訳でもなく神体の名を呟く。聞こえては居ないはずだが、『パラディンはそれに合わせる様に剣を掲げた。”邪神”は示威的な動きに恐れをなしたのか、近付いて来る様子はない。しばしその場に留まった後そのまま後退を始め、やがて見えなくなった。

「すごい……威嚇だけで”邪神”が後退するなんて……」

プラディナの威光は”邪神”をも退けた。かざした剣から放たれ

る光の刃が神体を照らし、その身を美しく輝かせる。その雄姿を目にしたものは誰もが思っただろう。間近に居た僕は声に出さずには居られなかった。

「聖女だ……聖女が帰還した……！」

エスキナ教団自治惑星『エスキナ』。光明の片鱗すら見えなかったその星に、今再び小さな光が灯った……。

## 2―1

「こちらがラグディアンの騎士候補を集めたリストです」

騎士団長が差し出した冊子を、マザー・ハルコは「ありがとう」とだけ言って、ゆったりとした手つきで受け取った。ページを一枚一枚丁寧にめくりながら、穏やかな、しかし威厳ある瞳で読み上げていく。やがて最後のページまで読み終わり、左上で止められたプリントをめくる前の状態に戻したハルコは、しかし無言のまま閉じた資料を眺めていた。

「……仰せの通り、精鋭を集めて参りました。お眼鏡に適う者はおりましたか？」

沈黙に耐え切れず再び団長が声を掛ける。しかし、次に紡がれた言葉はその質問に素直に答える物ではなかった。

「この中に、先程の戦闘で”邪神”と対峙していた騎士は居ますか？」

「先の戦闘で、ですか？」

団長は少し考え込んだ。先程の戦闘は連戦だった為、修理中の神体が多く編成を通常時から大幅に変更されていたと言う。その時に前線メンバーに選ばれた中で、最も”邪神”の近くに居たのが誰かすぐには出てこないのだろう。しばらくしてからハッとした表情を再びハルコに向けた。

「……ルエイユ・ゴードでありますか。いえ、彼は後方支援ですのでその候補には入っておりません」

ラグディアンは非常に高性能な神体だが、その分プラッテに比べて極端に数が少ない。現状ではマーズの前線部隊にしか配備されておらず、今回の教会騎士団への配備ですら奇跡に近かった。そんな貴重な神体を支援に回すなど宝の持ち腐れとしか言い様がない。団長はそう思いラグディアンの騎士候補は前線部隊からのみ選抜していた。

「後方支援ですか、一人だけ選抜されては不自然になりますね……でしたら試験は全員を対象としましょう。念の為、騎士団の名簿を後で送って下さい」

「ルエイユ一人を受験させる為にですか!?」

ハルコの指示の意図を汲み取り、団長は驚愕の声を上げる。彼にはハルコがルエイユにそこまで肩入れする理由が分からなかった。彼の実力は決して低くはないが、それでも前線に耐えうる物ではないと考えていたのだ。

ルエイユ本人が想像する以上に、彼は良い意味にも悪い意味にも有名だった。白兵戦が主であると言われるＶＡでの戦闘において、その技術が乏しい事はやはり良い印象にはならない。それを踏まえるとルエイユは致命的に無能な騎士である。しかし、それとは対照的に射撃の技術と対Ｇ訓練の優秀さは特筆すべきものがある。後方支援の基本、高機動射撃戦において彼の右に出るものは居なかった。だが……

「お言葉ですがマザー、白兵戦の出来ないルエイユにラグディアンの騎士が務まるとは思えません」

いくら射撃が上手くとも、それだけで戦える程”邪神”は甘くない。剣のない騎士を戦力として認める訳にはいかないだろう。そう

団長は結論付けた。

「……そうでしょうか。確かに彼は近接武器の扱いには極端に欠けています、それは先の戦闘でも分かりました。でも、逆に言えば実質武器をひとつ持っていない状態で”邪神”とあそこまで戦えた、とは考えられないかしら？」

「それは……　！」

団長は考える。仮に自分が同じ状態で、剣を持たずに戦っていたら、あのような戦いが出来ただろうか？　弾道を正確に予測しての回避、高速ながら安定した軌道での接近、そして瞬時にゼロ距離射撃を狙う判断力。そこで彼は「剣を失った状態」という条件下なら、その全てが理想的な行動である事に気付いた。

「……しかし！　事実、ルエイユは戦闘不能になり、神体を大破させています！」

「それが、彼の操縦にプラッテが耐えられなかったからだとしたら？」

「！？」

それは団長が思っても言葉にする事が出来ず、心にしまい込んでいたはずの仮説。ルエイユ騎の損傷は確かに酷かった。しかし、駆動部には奇跡的に被弾しておらず、制御不能になった直接的な原因は内部からの破損、との情報があった。それがもし、彼が”邪神”に「負けた」のではなく、ゼロ距離射撃で「自滅した」のだとしたら……

「全ては試験を行えば分かる事。前述の通り、試験は騎士団全員を対象とします……以上、下がりなさい」

「……はっ」

団長はそれだけ答え、ハルコに背を向ける。未だハルコの発言には納得出来ないが、だからと言ってここに留まる訳にもいかない。彼女の言うとおり、試験の結果で判断すれば良いだろう。なんとかそう納得して、彼は部屋を後にした。

団長が部屋を出た後、ハルコは小さく呟いていた……。

「あの時の彼の力は多分共鳴によるもの……恐らく、彼は……」

# 2―2

「ルエイユっ！」

コックピットを開くと、ミルニアさんが心配そうに中を覗き込んできた。後ろにはラスティさんもいる。僕がコックピットを出ようとすると、それより早くミルニアさんに引きずり出された。

「この馬鹿！　あんな無茶なマネをするヤツがあるか！」

僕の襟元を掴みながら大声を上げるミルニアさん。その勢いに面食らっていると、後ろのラスティさんがフォローを入れてくる。

「まぁまぁ、とりあえず無事だったんだから、そんなに怒るなって」

ラスティさんに諭されて少し落ち着いたのか、ミルニアさんの手が少し緩んだ。その間に何とか襟元から手を外す。今度はラスティさんが、僕に近づいてきた。

「脅かして悪かったな、ルエイユ。コイツさっきから自分のせいでお前が無茶したー、って騒いでてさ。心配してたみたいだから許してやってくれよ」

なるほど、ミルニアさんにしては珍しく慌てていると思っていたらそういう事だったのか。見ればミルニアさんはうつむき加減になって僕から顔を背けていた。もしかして、恥ずかしがっているのだ

ろうか？

「……悪い、お前の神体が達磨みたいになっちまったのを見たら頭が真っ白になってさ……。ついつい興奮しちまった」

「いえ、こっちこそ心配かけちゃったみたいで……有難うございます」

確かに掴み掛かられた時は少し驚いたけど、それは本気で心配してくれていたからに他ならない。僕にとってはその事実に対する嬉しさの方が大きかった。無意識にお礼を言ってしまったが、今思うと謝罪に礼を返すというのもおかしな話である。ミルニアさんも同じ事を思ったのか、一瞬表情を歪めてから苦笑いし始めた。

「それにしても珍しいよな。普段慎重なルエイユがあんな無茶な行動に出るなんて」

「あはは……」

ラスティさんの言葉に今度は僕が苦笑いをする。少しの間渇いた笑い声を上げた後、僕は誰にも聞こえない様な小さな声で呟いた。

「……なんででしょうか？」

「え？」

「いえ、何でもありません。それより、今日はもう部屋に戻って休みますね。なんとか助かったと思ったら、急に体の力が抜けちゃって……」

その場をなんとか取り繕おうとする。ラスティさん達の「ああ……」という府に落ちていなさそうな返事を背中に聞きながら、僕は早足にその場を後にした……。

「僕らしくないか、本当にその通りだよ……」

部屋に戻った後、ベッドで横になりながら僕は唸る様にそう言った。寝返りをうつと中途半端な硬さのベッドが小さく軋む。さっきもれたのは紛れもない本音だ。正直、僕にもなぜあんな事をしたのか分からない。機能不全のミルニア騎を見て前線に出ようと思ったのは間違いなく僕の意思だった。ノーロック射撃をしようと考えたのも僕だ。だがその後は？　普段の僕では思い付きもしない的確な戦術、出来ない様な洗練された動き。まるで僕ではないかの様な……

「……違う、あれは僕だった」

それはどんなに思考を巡らせても偽る事が出来なかった事実。あれは別人格や無意識の類で説明出来る物ではない、明確な僕の意識だった。だからあの時起こった事も全て覚えている。降り注ぐ破壊の閃光、視界を埋め尽くすレッドランプ、そして……”邪神”。霧の中に見えたのはＶＡにそっくりの装甲だった。あれが”邪神”の正体なのか。だとしたらなぜＶＡそっくりの外見をしている？　それともジギアス様が”邪神”に似せてＶＡを造ったのか？　一体何のために？

「一体何がどうなってるんだ」

胃の辺りがムカムカする。気持ちが悪い。自分の思考が及ばない所に存在する何か、それが僕をこの上なく苛立たせる。一体あの時の僕は……

「……いや、止めよう」

考えても分からない事にいつまでも悩んでは居られない。あの妙な感覚だって今回たまたま起こっただけで、常にああなると決まった訳ではないのだから。そうでも考えなければやっていられない、そんな気がした。

「パソコン……上からの通知を確認しないと……」

無理矢理に気持ちを切り替えようと、パソコンのスイッチを入れる。別の作業に没頭すれば今の気分を忘れられると思ったのだ。最初に確認するのは言うまでもなく通知。騎士全体に行われる連絡をまとめる掲示板の様な物だ。情報の伝達が円滑に行き届く様に、定期的な閲覧が義務付けられている。新着通知のリストを見ると、本日追加されたと思われる「ｎｅｗ」と書かれたものが目に付いた。

「騎士団全員を対象としたラグディアンシミュレーター訓練？」

騎士団全員？　ラグディアン？　タイトルにあったあまり聞く機会のない単語が疑問符と共に飛び交う。首を傾げながらタイトルをクリックすると、画面が切り替わり通知の詳細が映し出された。

「なになに、『明後日９：００より新規配備されるラグディアンの騎士を決定する試験をシミュレーターで行います。騎士団員は添付したソフトでシミュレーターの際に用いる兵装を選択した上で、訓練室に集合して下さい』……」

見れば確かに記事にはファイルが添えられている。ダウンロードして開くと、神体とゲームの装備欄のようなものが表示された。

「なるほど、これで各ジョイントに何を搭載するかを決めて、シミ

ュレーターで再現された神体で受験するんだ」

　装備欄は合計六つ。両腕に一つずつと肩にそれぞれ二つ取り付け可能となっている。それぞれの部位にかなり多彩な兵器が用意されていて、刀剣類や銃器は勿論のこと、バランサーユニットにスラスター、シールドに加え用途すら分からない物まで挙げて行けばキリがない。

「あ、武器ごとに動画が添付してある。使い方が分からない場合はこれを見れば良いのか」

　これは重要な情報だ。僕は射撃武器を使う事が多いから、軌道や特性は把握しなければならない。早速兵装を射撃武器のカテゴリで絞り込み、動画を一つ一つ見て行った。

「チャフグレネードはかく乱兵器なのか……じゃあこっちのピアシングレーザーって言うのは？」

　確認を続けている内にだんだんと頭がぼおっとしてくる。眠気が来たのだろうか、と両目をゴシゴシと擦って我慢した。その時は気付かなかったのだ、その時の自分が”邪神”と対峙していた時と同じ状態だった事に……。

｜／｜／｜／｜／｜／｜／｜／｜／｜／｜／｜／｜／｜／｜／｜／
｜／｜／｜／｜／｜／｜／｜／｜／｜／

「すいません、遅れました！」

　午前８：５４分。息を切らせながら訓練室に駆け込んだルエイユに、ラスティは片手で挨拶を返した。すでに模擬戦が始まっている

のを見て慌てる様子を見て、彼が時計を持っていない事に気付く。ラスティは安心させてやろうと自分の腕時計を見せた。

「ギリギリセーフだ。お前にしちゃあ珍しいな、寝坊か？」

ルエイユ・ゴードは小心者である。他者へ迷惑が少しでもかかる事は極力避け、人に頼っても良さそうな事も自分ひとりで何とかしようとしてしまう。待ち合わせをした時も常に十五分前には集合場所に到着していた。今回は時間にこそ間に合っているものの、今までと比べれば遅刻と言っても遜色のないレベルである。何か深い理由でもあったのか、と探りを入れるつもりでラスティは尋ねた。しかし、意外にもルエイユは首を縦に振る。

「はい、ラグディアンの武装がなかなか決まらなくて……」

「決まらなくてってお前、通知が来たのはおとといだろ？　丸一日悩んでたのか？」

冗談めかして聞く。流石にラスティもそれはないと思っていたのだ。実際のところ彼には既に理由の予想もついていた。昨日、一日の間だけロックが外されたシミュレーターのラグディアン訓練、それをしていたのだろう。昼間はベテランの騎士達が大挙して訓練室に駆け込んだ。その合間を縫うには深夜しかないはずである。しかし、これにもルエイユは意外な返答をしてみせる。

「それが、実はシミュレーター使えてないんです。一昨日の夜から次の日の昼くらいまでぶっ通しでカスタマイズして、そのまま寝ちゃったみたいで」

「おいおい……」

ラスティはそれ以上何も言うことが出来なかった。それは確かに

ラグディアンの長所は騎士の戦闘スタイルに応じたカスタマイズが出来る事ではあるが、プラッテから劇的に変え過ぎれば操作性の違いに慣れる時間が必要になる。それを全く行っていないとなれば、まともに動く間もなく撃墜されるだろう。

「お前、そんなんじゃ瞬殺されるぞ……って、そりゃ皆同じか」
「あの、それだとまるで試験を受けた人達が全員瞬殺されているように聞こえるんですけど」

ルエイユは首を傾げながら尋ねる。ラスティは目頭を押さえながら空いていた手でシミュレーターの状態を表示している大型モニターを指差した。映っているのは二騎のラグディアン。それぞれが武器を構えた状態で対峙している。試験は一対一での実戦形式で行われるのである。

「アレを見てれば分かるさ……次の模擬戦はミルニアの番みたいだな。ちなみに左がミルニア騎」

ラスティの言葉にルエイユは画面左に注目する。ラスティもまた神体の装備を確認する為に同じ方を向いた。ミルニアの乗るラグディアンはどうやら射撃と近接武器のバランス重視のようだ。右手にはプラッテと同じタイプのレールガン、左手には広い刀身に取っ手が特徴的なワイドディフェンダーが装備されている。持ち手を柄から取っ手に変える事によって、刀身を盾代わりにする事を目的とした攻防一体の武装である。更に肩部にはブースターとウィング。機動性も十分に確保している。

「高機動と盾で鉄壁の守りを固めて、レールガンで攻撃していくつもりなのか」
「それで推進系を壊して、ワイドディフェンダーで切り込む、です

かね。重量のある武器だから当たればひとたまりもありませんよ」

戦術的には極めて理に適っている。流石はミルニア、二人ともそう思った。神体は完全白兵戦仕様。肩部は全て機動性の確保に回し、腕部には細身のレーザーレイピアと大型タワーシールドが搭載され、射撃の要素は一切存在しない極端な武装。何度も見ているラスティにはもうそこから感じるものもなかったが、ルエイユはそれを見て驚愕の表情を浮かべる。

「あの装備、もしかして試験官は……！？」

ルエイユの反応も当然と言えるだろう。彼は先日の戦闘で”あの”神体を最も近い位置から見ているはずだし、第一彼が敬愛する人物の乗る神体の装備を知らないはずもない。

「ご明察、右はハルコ騎だよ」

ラスティの言葉を聞いてルエイユの目の色が変わる。画面に先ほどより三歩近づき、羨望の眼差しを向けるルエイユ。もはや彼にはハルコ騎しか見えていないといった様子である。ここまで来ると流石にミルニアを哀れに思う。しかし得意げにルエイユに語った手前、瞬殺されて欲しいという気持ちもあり、それがラスティの良心を小さく苛んだ。

間もなく訓練開始のアラームが鳴り渡る。その直後、音が止むか止まないかという刹那の事である。１０メートルはあったであろうミルニア騎とハルコ騎の距離は一瞬にして縮まっていた。ミルニア騎に動いた様子は一切なし。ハルコ騎が白兵戦に持ち込んだのだ。勢いのままレイピアが弧を描く。ミルニア騎のワイドディフェンダーはその一撃に耐え切れず、弾き飛ばされてしまった。

「は、速い！」
「耐えた！？」

ラスティとルエイユが同時に驚嘆する。同じ攻撃を見たはずの二人だが、しかし感想は全く逆のものだった。とは言え戦局の見立ては変わらない。そこに居た誰もが次の一撃でミルニア騎が撃破されると考えただろう。ハルコ騎も既に次の攻撃をする準備に取り掛かっている。しかし、小さな爆発がそれを止めた。ミルニア騎のレールガンがハルコ騎めがけて発砲されたのだ。ワイドディフェンダーの影に隠れていたが、盾と化したそれの向こうで彼のレールガンは既に照準が合わせられていたのである。

「ミルニアすげぇ、あのマザーに一発当てやがった！」
「……いや、当たってません」

感嘆するラスティを尻目に、ハルコ騎を見ながらルエイユ。爆発を起こした箇所を凝視している。その眼を追うと、ラスティにもレイピアの切先から白煙が立ちこめているのが分かった。

「あのタイミングで防御出来たのかよ……！？」
「それもタワーシールドを動かすのが間に合わないからレイピアを使ってます。とてもじゃないけど咄嗟の判断だとは思えない……」

想像もつかない程の攻防を一瞬で見せた二騎。しかしミルニアも今の一撃で策が尽きてしまったのだろう、レールガンを防いだノックバックで生まれたハルコ騎の僅かな隙にもミルニア騎は一切の動きを見せなかった。その無防備な神体にタワーシールドが叩き込まれる。この一撃でコックピット部が破損、模擬戦終了のアラームが鳴った。間もなくシミュレーターのハッチが開き、ミルニアが姿を現す。

「はぁー……駄目だった。やっぱりマザーには敵わない、か」
「いや、あのマザーに一瞬でも守りを固めさせたのはすげぇよ」

ラスティが見た限り、これまでの戦闘は全てマザーによる開幕直後の一撃で決着が付く極めて一方的な展開だった。その中で前人未到の太刀合いという領域に届いた彼を否定する者はこの中にはいないだろう。

「流石、戦闘技術に関しては隊長を超えると言われただけのことはあるな」

ラスティはミルニアへと小さく拍手を送る。やがて周囲に居た他の騎士達もそれに続き、訓練室には小さな喝采が巻き起こった。ミルニアはこそばゆそうに「止めろって」と周囲をたしなめる。

「だって、なぁ？　ルエイユだってすごいと思うだろ……ん？」

ルエイユに同意を求めようとしてラスティだったが、呼びかけた方向には先程まで立っていたはずのルエイユがいない。周囲を見回すと、彼はモニターの操作盤にかじり付いていた。ミルニアの戦闘ログを再生しては、画面を凝視している。

「ルエイユ、お前何やってるんだ？」
「マザーの戦闘を見直してるんだろう。ルエイユは昔からマザーにゾッコンだったからな」

ミルニアの説明に納得のあまり思わず「ああ……」と声を漏らすラスティ。言われて思い出す。面白い情報を拾って来ては仲間に教えて食事代をせしめていた自分に、ルエイユが聞きたがる話はいつ

もマザー絡みだった。彼にとって今は夢が叶った、いや今まさに夢見心地なのだろう。

「しばらくそっとしておこう。なんだか邪魔するのが悪い」

「その方が良いな……そうだ、次は誰が行く？　そろそろ次の模擬戦の準備が出来るだろ」

周囲に名乗り出る者は現れない。当然といえば当然だ、これほど見事な試合の次では他のタイミングより少々荷が重い。小声で話している騎士達の声を聞いてもおおよそ同じ理由でしりごみしている様だった。ラスティはつくづく思う、早めに済ませておいて良かったと。元々は後に乗る騎士達に乗った時の実体験情報を売ろうと考えていたからだったのだが。

「あの、皆さんよろしいんでしたら、僕が行っても良いですか？」

皆が牽制しあっていると、何処からか名乗りを挙げる声があった。その場にいた全員が声の主の方を見る。ルエイユである。

「ルエイユ、お前戻ってたのか」

「え、何処からですか？」

自分の世界、と言おうとしたところで慌てて口を噤む。恐らくルエイユは自覚していないだろう。言った所で首を傾げられて終わりである。

「いや、なんでも……それより、お前はそれで良いのか？　折角マザーの胸を借りるチャンスじゃないか」

「チャンスなのはいつ戦っても変わりませんよ。それにほら、僕だったらどんな成績でも大体言い訳が利きますから」

言われてから思い出す。ルエイユはシミュレーター訓練をしていないのだと言う。それならば確かに悲惨な結果になっても「練習出来なかったから」と言い訳できるし、元々彼は後方支援だ、過度の期待はされない。少々失礼な言い方だが、今の高まり過ぎた期待を元に戻すには彼以上の逸材はいないだろう。

「そう……だな。皆もそれで良いか？」

体裁を気にするならば今戦いたがる者はまずいない。周囲の無言はルエイユの出陣に対する実質の肯定となった。

「……よし！　そういう訳だルエイユ、行って来い！」

「あ、はい。じゃあちょっと行ってきます」

そういうとルエイユは申し訳なさそうに腰を軽く折り曲げながら騎士達を掻き分けていった。彼がシミュレーターに入りしばらくすると、画面に一騎の神体が表示される。ルエイユがカスタマイズした物だ。そしてそれを見た時、ラスティは声を出さずにはいられなかった。

「な、なんだこりゃ？」

まず一番最初に目に付いたのは両肩に取り付けられた大出力ブースターだ。従来のブースターより大型で、一基だけでも通常の3倍近い出力があると説明されていた。これを搭載すれば機動力には高いアドバンテージがつくが、重力負荷も相当のものとなる。並の騎士では押しかかるGで操縦すらままならないだろう。その上この神体にはブースターと対を成すべきウィングユニットが搭載されていない。推進力の制御は神体の姿勢のみで行わなければならないので

ある。当然、騎士に掛かる技術面の負担も尋常ではない。
さらに、腕部の武装にもラスティ達は違和感を覚えた。装備されているのはレールガンが二門。つまり存在しないのだ、騎士の象徴とも言うべき近接武器が。白兵戦は騎士の戦いの本懐と言える。それを捨てると言う事は、ラスティにとっては戦いを捨てる事にさえ感じられた。

「……ミルニア、お前はどう思う？」

横に立っていたミルニアに問いかける。こと戦闘に関して彼以上に詳しい人間はこの場にいない。自分には理解しきれないが、彼ならばもしや。ミルニアは考え込むような仕草をしながらルエイユの神体を観察する。しばらくすると、何かに納得したように頷きながら言った。

「……滅茶苦茶だな、セオリーのセの字も感じない」
「やっぱり……」

ラスティはまるで我が事の様に頭を抱える。折角のチャンスをこんな形で不意にしてしまうルエイユを少なからず哀れに思った。しかし、

「だが」

彼の考えをミルニアの声が遮る。ラスティは再びミルニアを見た。

「ルエイユらしい神体だと思う。あいつ自体が騎士としては規格外もいいところだからな、その長所を活かすカスタマイズだよ」

ルエイユの長所とはなんだったか。ラスティはしばらく思案した。

やがて浮かんだ答えは射撃が正確である事、対G訓練はいつも上位だった事、それらを総合した高機動射撃戦闘が得意である事の三点。確かにそれらを活かすならカスタマイズの方向性は間違っていない。

「いや、それにしても極端すぎないか？　あんなブースターじゃまともに動けるかも怪しいだろ」

「流石にあれは戦闘中には使わないだろう。長距離移動用か何かじゃないか？　ラグディアンの内臓ブースターがあればプラッテと同程度の機動力は十分出せるからな。お前も戦闘ではあまり使わない狙撃ライフルなんて付けてただろう？」

「まさかタイマンだとは思わなかったんだよ……」

説明に意地悪くそう付け加えたミルニアに、ラスティは愚痴っぽく返した。彼が腕部兵装に選択したのは狙撃用のロングライフル。連射性や反動を度外視し、長距離の敵を一撃で仕留める事に特化した高威力、高射程の銃だった。お世辞にも一対一の状況で役に立つ武装とは言い難い。それでもラスティがこの武器を選んだのは、模擬戦が団体で行われる物ならば戦略的に利用が可能だと思ったからである。

「俺、趣味でクレー射撃やってるんだよ。だからなんかの役に立たないかと思ってさ」

「ルエイユだって同じだ。機動性は足並みを揃える上では重要だからな」

高すぎる機動力は足並みを乱すと思われがちだが実際はそうではない。出力が低ければそれ以上あげる事は出来ないが、高い出力は調整で十分周囲と速度を合わせられる。ＡＩの搭載で相対的な速度を算出可能な現在では決して難しい事ではなかった。

「なるほどな……じゃあ、あとはブースターの分武器を削った事をどうやって補うかってところか」
「そういう事だ。まぁどれも一瞬でマザーに倒されなければ、の話だが……そろそろ始まるみたいだぞ」
ミルニアの言葉に二人はモニターへと目を移した。次の瞬間、その場にいる全員が我が目を疑う事になるとも知らずに……。

## 2―3

「流石にこれはない」

シミュレーターの中でデータをロードした僕は誰にともなく呟いた。カスタマイズをしている最中に頭がぼぉっとしてしまったのは認める。時間が無くて確認を怠ったのもいけなかった。だが、だからと言ってこんなものを装備しているとは、あの時の僕は一体何を考えていたのだろうか。

「これ、下手すれば戦艦のサブフライトシステム並じゃないか」

戦艦にはメインエンジンが被弾した時に墜落を免れる為に、サブフライトシステムを搭載するのだと聞いた事がある。要するに不時着する為に申し訳程度の飛行をするエンジンだ。しかし、曲がりなりにもあの巨体を浮き上がらせる程の推進力。小型の機動聖像に搭載することなど、とてもではないが考えられない。加えて両手に銃というエネルギー消費の激しい武装故に、防御に振る事が出来るエネルギーは数少ない。防戦になったら回避に徹するしかないのだ、この極端過ぎる機動性で。

「僕、なんでこれで良いと思ったんだろう？」

遅くまで考えていて寝ぼけていたしか思えない。とは言え、今からカスタムし直す事は出来ないだろう。どうやら僕は、千載一遇のチャンスを不意にしてしまったらしい。

『次の受験者はどなた？　名前を教えてくれるかしら』

「あ、はい！　教会騎士団第三分隊所属、ルエイユ・ゴード司祭で

す」

突然の通信に慌てて返事をする。初めて聞くハルコ様の声だと言うのに、突然の事でしっかり聞く事が出来なかった。今日は妙にミスが多い気がする、厄日かなにかだろうか。今度こそしっかり聞こうと、僕はスピーカーの振動に耳を澄まし、意識を集中した。

『！　そうですか、貴方が……神体はそれで間違いありませんね』

「はい、問題ありません」

彼女の声をしっかりと耳にした僕は淀みなくそう答える。その声はハッタリと思えない程しっかりとしていて、まるで最初からこの神体で挑むつもりのようだった。声にあわせて心にも自信がついてくる。今ならこれも使いこなせるのではないかと錯覚する程に。

『では、試験を始めます……貴方には期待していますよ』

「僕もです」

緊張のせいだろうか、僕は今おかしな返事をしている。僕も、ではまるで僕がハルコ様に期待しているみたいじゃないか。僕とハルコ様では立場が違うと言うのに、この言葉遣いは間違っている。だが何故だろうか、不思議と違和感はなかった。特に気にしないままモニターを眼前に据え、レバーを握る。

『模擬戦、開始3秒前』

システムが戦いの開幕を間近に知らせた。と、同時にハルコ様の神体が姿を消す。否、移動したのだ。方向は……左。射線上の直進を避けたのだろう。その甲斐あって僕の放った銃弾が虚空を裂く。

『2』

ハルコ騎はそのまま弧を描きながら僕の左を取り、一刀の下に神体を両断した。

『1』

そこまでの光景が鮮明に映し出される。モニターにではない、僕の頭に直接だ。当然といえば当然である。未だ戦闘は開始してすらいない。破壊されるどころかハルコ様も開始地点から動いてもいなかった。

「今のは、一体……」

『模擬戦開始』

「！」

号令と共にアラーム音が打ち鳴らされ、僕の思考は一気にかき消される。次の瞬間、ハルコ騎が姿を消した。一瞬見えたビジョンと同じだ。反射的に僕のレールガンで光を放つ。狙いは自分の左側、ビジョンの中でハルコ騎がとった軌道上だ。銃弾はハルコ騎にシールドを使わせ、次の一撃への猶予を僕に与えた。

「ランチャー、発射」

内心では驚いているはずなのに、特に表情に出す事もなく次の行動を叫ぶ。ＡＩが僕の声を聞き取り、神体左肩部のミサイルランチャーをハルコ騎に向けて発射した。白煙を撒き散らしながら僕とハルコ騎の間を飛び交う無数のミサイル達。それらはジグザグと移動をしながら不規則に近づいて行ったが、驚くべき事にハルコ様は最初に接近した一発をレイピアの切っ先で突き壊して見せた。その爆

発に周囲のミサイルも次々誘爆、煙がハルコ騎の周囲を侵食していく。

「次は……上か。移動開始と同時にレールガンをA調整に」

次々脳内に入ってくるビジョンを頼りに大出力ブースターに火をつける。直後に僕の真上にハルコ騎が現れるがすでに遅い、僕の神体はすでに爆発的なブーストに飛ばされて遥か下方に移動していた。距離を確認し、レールガンで威嚇を行う。速射仕様の短い弾丸がハルコ騎へ雨と注いだ。無論威力の低下したA調整はタワーシールドの前には無力だ。だが、シールドを使わせる事で一瞬だが視界を遮る事は出来る。僕はその間に進行方向を変え、ミサイルの爆発で起きた煙の中に紛れ込んだ。

「調整をBに変更」

そして煙の中から、今度はダメージが通るレベルでの銃撃を開始する。ここからならば神体の正確な位置も銃口の向きも見る事ができない。重厚なタワーシールドも向ける方向が分からなければ意味がないだろう。対してこちらはビジョンのおかげで、相手がどのタイミングでどの位置に居るかが分かる。そこを集中して攻撃すれば……

「!?」

更に追撃しようと意識を集中させると、自分の目前にハルコ騎が姿を現すビジョンが浮かぶ。咄嗟に攻撃を止め、後方に下がると次の瞬間、僕の居た位置をレーザーレイピアの一閃が通り抜けた。後退を続けながらレールガンを連射する僕。対するハルコ騎はと言うと、その光の筋をなんとレイピアのレーザーで相殺している。

「ああやって射撃を掻い潜ったのか……！」

レイピアから出力しているレーザーはレールガンなどより遥かに高威力。だが弾道を見切ってあんな細い刃で受け止めるなど並みの腕ではできない。さらに、どうやったのかは知らないが、位置が見えないはずの神体に正確な剣撃を仕掛けてきたあの技術……僕は改めてマザー・ハルコという人物の救世主たる才を思い知った。同時に、こちらの攻撃をことごとく無効化される状況に苛立ちを感じ始める。

「エネルギー残量は？」

『残り６７．３％』

ＡＩが返してくる予想通りの返答に、自然と小さく舌打ちが出た。今の攻防で既に3割近いエネルギーを消費してしまっている。ごく僅かな時間だったが、戦艦級のブースターによる高速移動、さらに銃撃の連発では仕方ないと言えば仕方ない。対してハルコ騎は恐らく十分なエネルギーを保有しているだろう。移動量は大差ないが、相手は機動性重視で最低限の武器しか搭載していない軽量型、加えて搭載した武器はエネルギー効率の良い近接武器である。詰まるところ、このまま戦闘を続ければジリ貧に終わる。

「逆転するには……」

どうやらレールガンは通用しそうにない。ならば使うとしたら、あと一回分の全門発射が可能なミサイルランチャー、そして未だ使っていない右肩部に備えられた切り札……

「……ピアシングレーザーなら」

貫通力に特化したこの武装なら、場合によってはあのタワーシールドだって貫通する事ができる。今のエネルギーなら、移動の分を考えてもあと一発くらいは最大出力での発射も可能だろう。残る問題は、距離。相手を防御もろとも撃ち貫こうと言うのだ、半端な距離ではエネルギーが摩擦で薄れて足りなくなる。少なくとも至近、よく言えば零距離発射が望ましい。だが、不用意に近寄れば瞬く間にレイピアの錆にされる。考えなくては、確実に懐へ飛び込み、一撃を撃ち込む方法を。頭の中をさまざまな行動を想定したビジョンが濁流の如く流れていく。その中から、一際輝いて見えた一欠片を僕は選び取った。

「ランチャー、発射！　同時にピアシングレーザー、エネルギー充填開始！」

僕の合図でランチャーが再び火を吹く。ミサイルは先程と違い、ハルコ騎の周囲をなぞるような配列で直進した。直後に、手元のレバーを引いて神体を一気に最大速まで加速させる。ピアシングレーザーへの充填も含め、エネルギーのメーターがみるみる内に減少するのが分かった。関係ない、どうせ次の一撃で仕留められなかったら負けだ。そう自分に言い聞かせ、焦りを無理矢理に押さえつける。そうやってミサイルと並走して見せると、ハルコ騎は冷静にコックピットを狙って剣を構えた。この状況でなんのためらいもなく攻めに転じる事ができるのは流石と言うべきだろうか。だが、それも”視えて”いる。

「……今だっ！」

今まさに剣が振り下ろされようという瞬間、並んでいたミサイルが一点に収束した。位置は、僕の目の前。僕は体育座りの姿勢をと

って爆発に備える。直後、眼前で爆発が発生した。

「……っ！」

至近距離での大爆発に、神体全体が大きく揺れる。視界は先日みたばかりの赤い警告文の嵐。無理もない、今の爆発でメインカメラと四肢は完全に吹き飛んでいた。僕が乗る神体はつくづくダルマ状態に縁がある。しかし前回と違うのは、計算の上でこうなっているという点だろう。腕も足もないが、まだ方のブースターは止まっていない。

「照準合わせ！」

進む先にあるのは咄嗟に盾を構えて爆発を防いだハルコ騎。メインカメラがない以上状態など確認できないが、間違いはない。先程”視えた”ビジョンがそれを教えてくれている。爆発の衝撃はほとんど壊れた四肢が持っていってくれた。軽くなった分速度も更に上がっている。この速度、如何なハルコ様の超反応でも対応出来まい。僕の神体は、身体一つでハルコ騎の盾に突進した。同時に、向きを調整したピアシングレーザーの砲身が盾に密着する。

『充填率１００％』

「ピアシングレーザー、発射！」

タイミング良くＡＩが吉報を告げ、僕はそれにすぐ返した。直後に衝撃、表示された破損率が重厚なタワーシールドがまるで氷を溶かすような勢いでへこんでいく様を知らせてくれる。その痛快な数値の移り変わりに僕は笑みを隠さなかった。救世主足りえる程の存在をこの僕が越える、そんな光景が目に浮かぶ。高揚する気持ちは冷静な判断力を失わせ、浮かんだ光景は”視えた”訳ではない事を

気付かせなかった。
ついに破損率が１００％となり、ハルコ騎本体にダメージが通り始める。しかしその瞬間、希望と共に視界が闇に染まった。

「……え？」

突然の変化に一瞬対応が遅れる。慌てて状況を確認しようとする僕の前に、うっすらとした光で警告文が映し出された……。

『ＥＭＰＴＹ　戦闘続行不能』

「……ルエイユ？」

フラつきながらコックピットから降りる僕を見て、ミルニアさんが声を掛けてくる。それは分かるのに、何故か僕は答える気にはなれなかった。ぼおっとした表情、重い足取り。客観的に自分を見たらどう考えても健康とは思わないだろう姿を周囲に晒す。

「ルエイユ、そんなに落ち込むなよ。あそこまで出来たのはお前が初めてだ。十分立派だったと俺は思う」
「え？　……ああ、有難うございます」

ミルニアさんの慰めに一瞬素っ頓狂な声をあげてしまったが、すぐに相槌で取り繕う。どうやら僕の様子をハルコ様に負けた事に対する悔しさだと判断した様だ。だから十分な戦果を出した事を賞賛してくれている。本当に出来た人だ、心から尊敬する。
だが、今の僕の心境はそれだけではなかった。無論的外れという事はない。負けた事への悔しさも確かにあった。しかし僕は知っているのだ、自分が言わば落ちこぼれで、今の様に戦えただけでも奇

跡に近いと言う事を。そして、それを知っていてなおこうも悔しがっている自分が理解出来なくなっている。僕の中に存在する僕すら知らない何か、今の僕にとってはこれ以上の恐怖はない。その何かが少しずつ強くなっているからなおさらだ。

戦っていた時に見えたあのビジョン。あれは確実に未来を映し出していた。それも一度や二度じゃない、今の戦いはほぼ全てビジョンのお陰だったと言って良い。偶然ではないのだ。”邪神”と戦っていた時はここまでの事、起こらなかったのに……僕の中にある何かは着実に強くなっている。いずれ何かに押しつぶされるのではないかと思うと、不安だった。

「……おい、ルエイユ。お前大丈夫か？　顔が青いぞ」

僕がずっと俯いている事に気付いたのか、ラスティさんが顔を覗き込んでくる。情報を扱う事が多い人だからか、人の変化には敏感らしい。

「大丈夫ですよ」

「でも」

「大丈夫、大丈夫ですから……」

重ねて聞いてこようとする声を遮って、僕はそう答えた。本当は全然大丈夫じゃない。でも、こんな事を言っても多分誰も信じてくれないから。

「僕なんかの事より、次は誰が行くか決めませんか？　あんまりハルコ様をお待たせするのも申し訳ないですし」

なんとか話の流れを変えようと、違う話題を振る。効果は決して小さくないはずだ。僕がここまでまともに戦ってしまうのは、僕自

身も含め誰もに予想外だったはず。落ちるどころかさらに高まる期待の中模擬戦を行うのは、誰もが避けたいところだ。案の定、騎士達は互いに牽制をし始めた。

誰一人として動けないがんじがらめの状況、しかし唐突に思わぬ終止符が打たれる。どこからともなく、煙を吐き出すような空気音が聞こえてきたのだ。全員が顔を見合わせる事を止め、音のした方向に目を向ける。そこではシミュレーターのハッチが開こうと、白煙を排出していた。無論僕が入っていた物ではない、それと対になって設置されていたもう一つ。即ち中に入っているのは

「……ハルコ、様？」

ハッチが開ききらない内にブーツの先が顔を出す。やがて完全に開閉作業が終了すると、一人の女性が姿を現した。全身を黒のカソックで包み、その上から金の装飾品をあしらった、質素ながら美しい出で立ち。豊かなボディラインとしなやかに伸びた黒髪が一層美しさを際立たせる。エスキナ教団大司教にして世界最強の騎士、ハルコ・オリハラ。生涯写真でしか見る事はないだろうと思っていた人物が、今僕達の目の前に立っていた。

「マザー、どうかなさいましたか？　試験はまだ途中のはずですが……」

誰かがおずおずとハルコ様に声を掛ける。整備班だ。彼らとしては訓練の最中にシミュレーターから出てくる理由に不安があったのだろう。自分達に不備があって戦闘の続行が不可能になったのではと考えるのは、現状からすると自然な事だと思う。その暗い表情を読み取ったのか、ハルコ様は優しげな笑みを浮かべながら答えた。

「大丈夫ですよ。ただ、今の戦闘で少しレバーを強く動かし過ぎて

しまったので、念のため確認して頂けますか」

彼女の言葉に整備班の男性は一瞬安堵の表情を浮かべるが、すぐに真剣な面持ちとなり「はっ、ただちに！」と手を振りながらシミュレーターに向かった。それを合図に周囲に居た数名も彼に続く。彼が班長だったのだろうか、統率も取れているし、何より切り替えが早い。第二の戦場と言われるＶＡの整備を生き抜いた仕事人達の為せる業だった。ハルコ様は彼らの変貌ぶりに一瞬面食らったが、すぐに逸る彼らを落ち着けに向かう。

「そんなに慌てなくても大丈夫。受験者が途絶えてきた様だから、丁度今日はここまでにしようと思っていたんです」

今度は騎士達が安堵する番だった。これで悩みが一気に解決する。今の善戦ムードも明日になれば忘れ去られているだろう。僕も心の隅にあった、ムードを作った張本人である罪悪感からやっと解放される。気分が晴れた騎士達は、それぞれがリラックスムードで伸びなどを始めた。

「本日はこれにて解散。なにか問題が発生したら、騎士団長に連絡してください」

すっかりだらけてしまった騎士達に少しため息を漏らしながら、苦笑交じりにハルコ様が言う。そのままブーツらしいカツカツという足音を響かせながら部屋を後にしようとしていたが、扉の前辺りまで行ってから不意に立ち止まり、再びこちらを向いた。

「そうそう、ルエイユ・ゴード司祭は後で第一客室まで来てください」

それだけ言って部屋を出る。間もなく自動開閉の扉が、彼女の姿を完全にシャットアウトした。しばらくの間、何が起こったのか分からず呆然と閉まった扉を見つめる。意識を戻してくれたのは肩に走った振動だった。

「ルエイユ、やったじゃないか！」

肩を叩く手の主はミルニアさんだった様だ。まるで我が事の様に喜んでいる。対する僕は、ただ首を傾げる事しか出来なかった。

「僕、何かやったんですか？」

今のはただ呼び出しを受けただけだ。そしてこれは僕の個人的な偏見なのかもしれないが、呼び出しと言う物にあまり良い印象はない。大抵隊長から直々にお叱りを受ける時、提出書類に不備があった時、僕が偉い人に呼び出される理由など、いつもそんなものだった。そういう意味では、僕は今むしろ不安を感じている。

「まさか、今の戦闘で何かまずい事をしたんじゃ……」

「ない、いくらなんでもそれはない。今の戦闘の後だったら、どう考えても戦績の評価に関する何かだろう。型破りな神体だったとは言え、他の騎士がほとんど瞬殺されている中であれだけ善戦をしてみせたんだぞ？」

僕の予想を全否定した上で新しい仮説を語るミルニアさん。確かに僕の発想がネガティブな事は生まれつきなので認めるが、さすがにミルニアさんの説もどうなのだろうか。よしんば先ほどの戦闘が善戦であったとしても、その結果が反映されるのはラグディアンの騎士の選定と既に決まっている。ならばわざわざ呼び出さずとも、結果発表の時にまとめて言えば済む事のはずだ。

「俺はラグディアンをお前に先行支給するつもりなんじゃないかと踏んでいる」

表情から僕の考えを察したのか、ミルニアさんはそう付け加えた。予想はさらに続く。

「ここでラグディアンの騎士が決定したとして、それですぐに戦力が大きく変わる訳でもない。なにせマーズのエリート達ですら使いあぐねた神体だ、俺達がそうそう使いこなせるものじゃない。だがルエイユ、今の戦績だけを見るならお前は違う、言わば即戦力だ。ラグディアンが一騎加われば戦況が変わる。マザーはそれを期待したんじゃないか？」

そこまで一気に言うとミルニアさんはこちらの様子を伺ってきた。同意を求めている、と言う事だろうか。確かにこの話、矛盾はしていない。楽天的に考えればこういった事も十分起こりえるだろう。戦力になればラグディアンは一騎いるだけでも戦況が一変してもおかしくないスペックがある。”邪神”にいつも負け越している騎士団としてはそれを求めるのも分からなくはない。しかし、

「それでも少し楽観的過ぎるんじゃないでしょうか。確かにラグディアンが即戦力になれば頼もしいけど、模擬戦一回じゃあ偶然って事もあるし、いくらラグディアンでも一騎で”邪神”との圧倒的戦力差を埋められるとは思えません。そんなに急いで投入する理由にはならないと思います」

“邪神”の力を体感した者なら分かる。一騎の力は決して高くないものの、プラッテとの一対多を実現し、過去何度もプラディナと互角の戦いを見せるその能力の前では、さしものラグディアンも一

騎では対応の仕様もない。防衛に徹したとしても、どれだけの時間稼ぎになるか。それならば一まとめにして投入した方が、その分訓練期間も設ける事が出来て生存率は跳ね上がる。月並みな言葉だが、戦場における戦力は決して足し算ではないのだ。例えば一騎で訓練中の三倍強い即戦力が居たとして、それでも一騎の即戦力より、三騎の訓練中の方が圧倒的に強い。戦力はまとめて投入するに限る。

「じゃあ、即戦力が欲しい理由になりそうな情報を一つ教えてやろうか」

ミルニアさんが僕の返答に頭を捻り始めると、今度はラスティさんが後ろから近づいて来た。その自信ありげな表情は何度か見たことがある。良い情報を見つけて誰かに売ろうとしている時の顔だ。僕は咄嗟に身構えてしまう。

「最近この辺りに宇宙海賊が出るらしい。近隣の惑星でもう何件か被害が出たそうだ」

ラスティさんはミルニアさんを見ながら言った。どうやら今回の狙いはミルニアさんの方だった様だ。安心したところで情報に対する疑問を投げかける。

「エスキナ近隣だったら騎士団に救難要請とか来るんじゃないですか？　一度も聞いた事ありませんけど」

「まぁ、一度も出された事がないからな」

教会騎士団は基本的には”邪神”しか相手にしない。一応戒律で、ＶＡによる戦闘行為は禁止されているのだ。しかし、銀河連合が定めた法では救難信号があった場合、その能力のゆるす限り対象を助ける義務がある。流石の教団もこれには逆らえず、救援時は例外と

なっていた。無論信号を出す為の一定条件をクリアしている者だけに限られるが、略奪行為の被害は中でも最重要項目とされている。エスキナ近隣なら騎士の救援も十分あり得るのだ、それを加味しても救難要請を出さないのはおかしい。

「正確には出さなかったんじゃない、出せなかったんだ」

疑問の答えはすぐにラスティさんが教えてくれた。なんでも犯行がとても鮮やかで、信号を出す前に船団が全滅していたのだそうだ。レーダーの反応もなく一機の護衛艦が突如轟沈、その後レーダー範囲外から立て続けに砲撃が放たれた。混乱に乗じて貨物船のコンテナのみが切り離され、それ以外は撃墜されたのだという。にわかには信じがたい話だ。

「そう大きな商船団ではないみたいですけど、それにしたって……」

「確かにそうなんだが、今のミルニアの仮説と組み合わせるとどうだ？」

僕はラスティさんの予想外の返答に「どうだ、と言われても」と一瞬口ごもる。ミルニアさんの仮説といえば、戦力の即時増強をする為に僕にラグディアンを先行配備するつもりなのではと言うもの。そして僕は「一騎増えたところで戦局は変わらない」という理由でそれを否定した。それはあまりに”邪神”が強すぎるからであり……

「……あ」

「つまり、戦力増強の目的は海賊対策かもしれない、と」

“邪神”ではない、ただの人間相手なら一騎でも十分な戦力となるという事である。そして今の話に間違いがなければ、その重要な一騎を僕が任されるという事にもなる。

「そんな一回のまぐれ当たりで重要な役を決められても……」
「いや、俺は適任だと思うけどな」

僕の弱気な発言に、ミルニアさんが予想外の返事をしてきた。

「自分では気付いていないかもしれないが、お前は確実に強くなってる。この前の”邪神”の時も今も、結果は散々だったけどお前の動きは凄かった。正直、あれほどの挙動は俺にも真似できない」

挙動、それは確かに僕も認めるところではある。確かにあの時の僕の動きは、自分で言うのも変な話だけど、凄かった。まるで自分ではないような、でも自分でしかありえない。そんな妙な気分で、どう動けば良いのかがごく自然に浮かんできたあの不思議な感覚は、今でも手に残っている。でも、あれは僕であって僕ではない。分からないのだ、どうしてああなったのか。どうしたらああなれるのかが。それを伝えようと一瞬口を動かすが、すぐに止めた。到底信じてもらえるとは思えないから。

「お前はもっと自分に自信を持った方が良い。そうすれば、お前はもっと強くなれる。俺はそう思うよ」

言いながら僕の頭にポンと手を置いてくる。とても暖かい、ミルニアさんの優しさが伝わって来るようだ。それを感じると、僕は真実を語るつもりだった口で「ありがとう、ございます……」とだけ小さく呟いた。ここで本当の事を話すのは、逃げだと感じたのかもしれない。迷うのではなく、あの自分と向き合いたい。ミルニアさんの言葉で、僕は初めてそう思った。

「さて、少し遅いけど朝飯でも食べるか。折角だから皆で食べよう

ぜ」

部屋の自動扉を開きながら、ミルニアさんが合図を送ってくる。

僕とラスティさんはそれに釣られるように、少し急ぎ足で部屋をあとにした……。

## 2―4

「少し遅くなっちゃったかな……」

格納庫とは違う、小奇麗な廊下を僕は駆け足で通り抜ける。後で来いと言われていたが、具体的にいつ頃なのかを聞いて置けば良かった。もしかしたら少し遅くなり過ぎたかもしれない。食堂でのミルニアさん達の「昼食をおごるか」のやり取りが面白くて、つい見入ってしまったのだ。しかしラスティさんも商売上手というか、調子が良い。彼は先程ミルニアさんの肩を持つ形で出した海賊の情報、アレを持ち出して「別に押し売りをする気はないが、参考までに俺は今日Ａランチを食べるつもりだ」とだけ言った。ミルニアさんも最初は押し黙っていたが、最終的に観念したのか頭をうなだれながら「……奢ってやる」と答えていた辺り、律儀だと思う。お互い一見正反対の性格をしている様に見えるが、案外良いコンビなのではないか、と僕は感じていた。

しばし時を忘れてふと時計を見ると、針は１１時を指している。昔人を訪ねる時は早過ぎない午前中、主に昼食前１１時半前後が良いと聞いたのを思い出した僕は、教会内の客間に足を運んだ。この道の最奥にはハルコ様が言っていた第一客室がある。何故第一客室がそんな奥にあるのかと昔は思っていたが、この第一客室は客人の中でも特に位の高い人物を招くいわゆるＶＩＰルームだ。相応の広い場所を確保する為に奥に作られたのだと、ラスティさんが言っていた気がする。程なくして廊下の突き当たりに自動扉とは思えない程豪奢な扉が視界に入った。インターホンを押そうと手を伸ばす。と、その前に中から声が聞こえてきた。

『本当に貴様の代わりが務まるのだろうな、その小僧に』

「！」

驚きのあまり思わず手を引っ込める。聞こえてきたのは男の声色で、明らかにハルコ様の声ではない。通信か何かをしているのだろうか。出直した方が良いか、それとも通信が終わるまで待つべきか、その場で少し考え込む。

「ええ、ルエイユ・ゴードなら問題ないでしょう」

「……え？」

男の声に別の声が答えた。今度は間違いなくハルコ様の声だ。しかしそれより、僕の名前が上がった事に驚きを隠す事が出来ない。なんの話をしているのか、だんだん気になってくる。考えた末、僕は「ここで通信が終わるのを待っているのだ」と自分に言い聞かせつつ、その場に残る事にした。

「白兵戦は不得手なようですが、射撃は申し分ありません。団長の話では、対G能力においても優秀だとか……あつらえた様な能力です」

『乗りこなせるかなど大した問題ではない。私は”動かせるのか”と聞いている』

通信の男が鼻で笑いながらハルコ様の言葉を一蹴する。その馬鹿にしたような態度に僕は内心少しムッとした。折角ハルコ様が僕に身に余る程の評価を下さったようなのに。一体この男は何者なのだろうか。僕の疑問などお構いなしに会話は進んでいく。

「そちらも概ね確認出来ました。”邪神”との戦いの時、そして今日の模擬戦。そのどちらにおいても彼は共鳴反応を見せています。模擬戦の様子から察するに、恐らく覚醒も近いでしょう。十中八九、彼はプロトグリードです」

「プロ、ト……」

ハルコ様が何かの名前を口にした途端、胸を締め付けられるような感覚に見舞われた。反芻しようとしても、苦しさで口がうまく動かない。プロトグリード、初めて聞く名前のはずだ。それなのにどうして。僕がそうだからとでも言うのか。ならばプロトグリードとは、一体。

『欲望に取り憑かれた蛮族めが。よもや教団の中に生き残りが居るとはな』

男が腹立たしげに答える。蛮族という言葉が聞こえたが、この口調からだと本当にそういった種族か何かがいるのか、それともそう呼ばれる人々を蔑んでいるのか判断出来ない。ただ一つ、この男がプロトグリードという物を快く思っては居ないという事だけはひしひしと伝わって来た。

「……ともあれ、彼ならばカルマリーヴァを任せても大丈夫でしょう」

男の言葉にハルコ様は答えず、さりげなく話を逸らす。ただ、一瞬辛そうに息をのんだ気がした。まるで、自分自身が傷ついているかのように。声色だけでは判断出来ないが、もしかしたら彼女もプロトグリードとやらなのだろうか。

そして気になる事がもう一つ、カルマリーヴァを任せるという言葉。僕に”邪神”と戦えと言う意味か、とも思えるがなんとなく違う気がする。なぜそう思ったのかは分からない。だが感じるのだ、心がざわついているのを。そしてざわつきは僕に更なる直感を与える。恐らく、彼らは何か良からぬ事を考えている。

「……出直そう。今顔を出すのはまずい……うわっ！？」

部屋から引き返そうと後ろを向いた瞬間だった。思わずよろけてしまう程の揺れが身体を襲う。同時に聞こえて来る派手な爆音。この振動、いつもコックピットで感じる物と良く似ている。間違いない、エスキナは何者かの襲撃を受けているのだ。

「それにしてもこれ程の砲撃、一体どうやって……」

エスキナは一教団が所有する小型の物とは言え惑星だ。それを揺るがす攻撃など、戦艦でもない限りできはしない。だが、ここだって丸裸という訳ではないのだ。相応の防備はあるし、攻撃圏内に入ればレーダーが教えてくれるはず。

「まさか、レーダーに映らない？」

そこまで考えてラスティさんの話していた海賊話を思い出す。レーダーの範囲外から砲撃を仕掛けてきた船に、存在を確認されなかった貨物室を切り離したなんらかの機体。噂が本当だとしたらこの芸当もできるかもしれない。

腕に付けた通信端末を見る。召集はまだ掛かっていない様だ。まだ敵が見つかっていない、という事だろうか。しかし、それも時間の問題だ。戦闘準備を始めておいた方が良い。僕は廊下を先程とは逆方向へ走り出した。

「ルエイユ！　来ていたのですか」

間もなく背後から聞こえて来た声にドキリとする。先程まで聞いていた声だ、間違えるはずもない。

「ハルコ様！」

罪悪感に苛まれながらも、なんとかそれだけ口にする。盗み聞きをしていた事を気取られないように後ろめたさを心の奥に押し込んだ。

「申し訳ありません。部屋の近くまで行ったのですが、なにやらお取り込み中だった様なので引き返させて頂きました」

バレないようにそう説明する。全てが全て嘘という訳ではない、これならば怪しまれる事もないだろう。第一、今は妙な勘繰りをしている場合でもない。予想通りハルコ様も特に気にした様子はなかった。

「この揺れは敵襲です。沢山の悪意が見える……大型艦だわ」

「分かるんですか？」

安堵に胸を撫で下ろしたのも束の間、目を閉じながら静かに言うハルコ様に、僕はそう尋ねる。この区画は本来戦闘要員にはあまり関係のない場所だ。戦術的な設備は何一つない。それなのに情報を知りえるのは、彼女に備わった聖女の力か何かなのだろうか。

「ある程度は。この様子では恐らく艦載機も出てくるはず。私は輸送艦に積んであるプラディナの所に向かいます、貴方もお急ぎなさい」

それだけ言うとハルコ様はすぐそこまで見えていた廊下の突き当たりを左……ＶＡ格納庫とは逆の方向に曲がった。あちら側にあるのは確かＶＩＰの艦を停泊させておく専用ポートだ。当然の事ながらここからかなり近い。どうやらハルコ様は有事に備えてプラディ

ナを、より近くにある輸送艦に搭載したままにしていたようだ。僕がその機転に感服していると、彼女は何かを思い出した様に角まで戻って来て、僕に何かを投げてよこした。片手でキャッチするなんて格好の良い真似は出来ない、僕は両手で何とかそれを受け取る。

「これは……カード？」

手元に収まったところで渡された物を改めて確認すると、カードというよりはカードキーに近い物だった。比較的硬質なプラスチック素材に、中心部に埋め込まれたチップ、角に書かれた三角のマークと「ＩＮ」の文字が機械に通す物だと言うことを表している。

「それはＶＡのマスターキー。エスキナに所属するＶＡは全てそれで起動する事が出来ます。貴方はそれでラグディアンを起動させて搭乗しなさい」

「ラグディアンを！？」

僕は驚きの声を隠そうとしなかった。マスターキー、名前を聞くからに重要な役職しか持つ事の出来ない代物だという事が分かる。それを預けるというのだ、未だ配備も決まっていないラグディアンに僕を乗せる為に。

「緊急事態ですので特例で私が許可します。ラグディアンの基本性能はプラッテのそれを遥かに凌駕する物、格納庫にある一番騎は機動確認用の基本装備ですが、貴方ならばそれを十分に活かす事が出来るでしょう」

何を根拠に、出かけた言葉が喉下で止まる。見てしまったのだ、ハルコ様の確信に満ちた眼を。まるで僕を見透かすような、僕以上に僕の事を知っているような迷いのない瞳。その眼光の前では、僕

に反論などという選択肢はあるはずもなかった。

「貴方は、強い」

有無を言わせぬ表情のまま、諭すように彼女が言う。その声は清廉ながらも力強く、僕は後頭部をかなづちで打たれたような、それでいて頭が冴え渡るような妙な感覚に襲われた。

「騎士としての才能はないかもしれない。でも人として……いえ、ただの人では持ちえない才能が、力が貴方にはある。私には分かります、私も貴方と同じだから」

「それが、プロトグリード」

思わず小さく呟いてしまう。驚きを見せるハルコ様を見て、自分でも失言に気付き口元を押さえた。ハルコ様の口が小さく動く。声は聞こえなかったが「知っていたのですか」と言っている様に見えた。

「……想いを強さに変える力、貴方はそれを持っています。できるならその力、ジギアス様の為に……」

そこまで言った所でハルコ様は、一瞬ハッとした表情をしたかと思うと僕に背を向ける。

「……先を急ぎましょう」

彼女は苦しげな声で搾り出すように呟くと、そのまま走り出し再び曲がり角に消えて行った。

立ち去るハルコ様を眺めながら僕は考える。あの方が何を思って僕にこんな事を言ったのか、そして何を思って途中で止めたのか、

本当ならそんな事を考えるべきなのだろうけど。僕にはそれ以上に気になる事があった。

「想いを強さに変える……」

それがプロトグリード。ならば僕の想いとはなんだ？　そもそも想いの定義とは？　曖昧過ぎるハルコ様の言葉だけではプロトグリードの全容を窺う事はできない。自分の事すら知らないというのは何とも不安なものだ。だが、僕にはプロトグリードに関する情報があまりに少ない。あと一つ、ハルコ様が通信で話していた男の一言。

「欲望に取り憑かれた蛮族」

手が震えているのが分かる。怖いのだ、自分がそんな恐ろしい存在であると考える事が。人には理性がある。どんなに欲望を持っていても、それで押さえる事ができるからこその人なのだ。欲望に取り憑かれたのなら、それは既に獣である。もし男の言う事が本当なら、僕は今あるこの理性すら失ってしまうのか。

「……いや、今は考えるな」

気にならないと言ったら嘘になる。だが、プロトグリードが今の僕に力を与えてくれているのも事実だ。そして今の僕には力が必要だ、目の前の敵から人々を守る力が。幸い理性はまだ失われていない。力に清濁はなく、それを決めるのは使い手なのだ。今はこの力、間違わない様に使おう。そう自分に言い聞かせ、僕は格納庫へ向かった……。

「はぁ……はぁ……」

道のりにして半ば程であると思われる工業区。僕は早くも息を切らせ始めていた。騎士というものは必ずしも体力が必要な物ではない。無論戦闘時に受ける衝撃に耐える程度には必要だが、逆に言えばそれさえあれば操縦自体は手先で行うので、別段運動が出来なくても十分操縦は務まるのである。かく言う僕はというと、ご覧の通り致命的なまでの運動音痴だ。客間から格納庫までは約３ｋｍ。成人男性なら１５分前後で到着してもおかしくない距離だが、情けない事にそれすらも走破できないでいる。

一旦速度を緩め、息を整えようとしたその時、先程と似た振動が周囲を包んだ。また砲撃が仕掛けられたのだろう。着弾点が近いのか、先程よりも随分揺れが大きい。その勢いは地を揺るがすだけに止まらず、上空から鉄塊が降り注ぐのが見えた。

「うわあぁぁぁぁあっ！」

思わず声を上げながらその場で頭を抱えてしゃがみ込む。あんなものが当たったらもはや頭を防いでも何の意味もないのだろうが、これはもう脊髄反射である。幸い瓦礫は僕の周囲にのみ落下し、中心部にいた僕は少し揺れで身体がよろめいたくらいで怪我一つなかった。安心して小さく息をつく。しかし頭を下に向けた瞬間に見えてしまった。自分が立っている鉄製の床に、大きなヒビが入っているのが。

「……まずいっ！」

最早疲れていた事すら忘れる程慌てながら前方に向かってダイブする。無論着地など出来ず僕は無様にも地を舐めた。直後、狙ったかのように僕が立っていた場所めがけて瓦礫が落ちる。三度足元が大きく揺れ……る事はなかった。その揺れるはずだった床は、既に

崩れ落ちてしまっていたのだから。

「そんな!?」

馬鹿な、という暇もなく僕の身体も落下していく。転倒した状態ではその場から逃げる事も叶わない。なんという事だろうか、僕は破砕した床と運命を共にし、そのまま遥か床下まで落下する事になってしまった……。

「いたた……」

軋む様な痛みに耐えながら身体を起こす。視界に広がったのは機械的な壁に囲まれた、そこそこの広さがある空間だった。初めて見る部屋だ。エスキナがスペーズを有効利用する為に地下室を多く有しているのは知っていたが、まさか工業区の地下にもあるとは。見たところそう深い位置にある訳でもないらしい。僕が落ちたと思われる穴も十分見える範囲にある。もっとも、よじ登るには高さがありすぎるが。

「まいったな……」

急いで出撃の準備に取り掛からなければいけないのに、とんだ足止めを喰らってしまった。この見ず知らずの部屋から格納庫まではどれだけあるのだろうか？　見たところ壁などの材質は似ている様だが、この辺りではまだ格納庫まで距離があるため、地続きになっているとは考えにくい。まずは外に出て位置関係を確認しなくては、と思い周囲を見回した。しかし、

「……出口がない？」

四角い空間の内、一面は何らかの装置が立ち並んでいた為、残りの三面を見たが扉らしい物が見当たらない。馬鹿な、扉がないのなら一体どうやって出入りすれば良いのだ。部屋は薄暗い、おそらく見落としたのだろう。そう思い、改めて壁の一面一面を見直してみる。しかし、近くで見ても三面には出入り口は存在していないようだ。仕方なく、駄目元で残りの一面も確認した。すると、驚くべき事に装置の奥にはまだ空間が繋がっており、そこには人がくぐるにはあまりにも大きい扉があった。

「これは、ハッチ？」

ハッチ、いわゆるＶＡの出撃口だ。どうやらここはやはりＶＡの格納スペースであるらしい。その面には格納庫と同じような装置が数多く設置されていた。しかし、それでも疑問は残る。この構造ではＶＡを用いて外から入って来るしかないではないか。しかも、入ってきた所で中の人間はここから出られない。ＶＡから降りたところで出口がないのだから。つまり、ここはＶＡを置く事しか出来ない場所なのである。まるで、見られたくない神体を隠すかのように。

「……まさかね」

隠すにしてもここではいざ使う時に一苦労だ。そんなはずはない、そう思っていても一度浮かんだ考えは止まらず、ついつい発進口にＶＡがないかを確認してしまう。しかし、そこには予想外と言うか、予想通りと言うか……そう、確かにあったのだ、ＶＡが。

「ま、まさか本当に？」

僕は動揺しつつも神体に近づいてみる。疑問は残るがもし僕の予

想が正しいならこれは隠さなくてはならない神体、例えば開発中の最新鋭騎などである可能性が高い。それを一度見ておきたいと思ったのだ。

考えた通り神体は未発表の物だった。ラグディアンに近いフォルムをしているが、武装は固定で重装甲。背部には巨大なブースターを積み、機動力を確保しようとしている。更に肩にはまるで針の様に取り付けられたレーザーキャノン、胸部には巨大な砲身が深紅の光沢を放っていた。そう、まるで怪物が眼をギラつかせているように……

「……え？」

ゾクリ、と背中に悪寒が走る。そして、脳裏に叩き付けられる強烈な既視感。そんなはずはない、僕はこんなＶＡは初めて見るのだ……本当にそうだろうか？　この邪悪な雰囲気すら漂う輝き、何処かで見た事がなかったか？　あったとしたら何処で？　そうだ、ＶＡとしては確かに初めて見るだろう。あの時は、ヤツがＶＡなどとは思っていなかった。だが、黒いシルエット、赤い瞳、神速を思わせる機動力、全てがひとつの事実を浮かび上がらせている。間違いない、コイツは。僕は無意識に、その名を口にしていた……。

「”邪神”……カルマリーヴァ……」

## 3―1

『アスティル、そっちの様子はどうだ』

アスティルと呼ばれた青年は耳元のスピーカーから聞こえてくる呼びかけにヘッドセットのマイクをずり下げた。

「はいこちら現場のアスティル・イーゼン、格納庫からちらほらとＶＡが出て来んすよ」

言いながらモニターを確認する。惑星の壁面に空いた大きな穴、その中から次々と騎士達が姿を現す光景が、かなりの高画質で表示されていた。しかしそれだけの解像度で写せる程に近くにいるはずなのだが、一騎とて彼の存在に気付く者は居ない。全員が真っ直ぐに彼の通信相手の方へと歩みを進めていた。

「こりゃこりゃ、見事にステルスに引っ掛かっていんす。今なら一網打尽にできんすね」

薄く笑みを浮かべながら訛り交じりにそう報告するアスティル。通信機からは粗野な口調で、それでいて威厳のある低い声で返事が返ってくる。

『アホか。やる事やる前に姿を晒してどうするよ』

「って言われてずっと隠れてたら、この前の仕事はコンテナ切るしか残りんせんしたね？」

アスティルは不機嫌そうにそう答えた。通信相手は一瞬言葉を失ったらしく、僅かな沈黙が二人の間を包む。しばらくすると先程の

威厳は何処へやら、取り繕うような焦りの混じる声色が、再びスピーカーから流れ始めた。

『いや、あれはオレが悪かったって。アイツら思った以上に根性がねぇもんだからよ、まさかあんな牽制が当たるとは思わなかったんだよ』

「おかげさまでわっち、欲求が溜まってしまいんしたよ」

畳み掛ける様に付け加えるアスティル。彼としては不本意極まりないのだ、好き放題する為に加わった海賊団で、なお我慢を強いられるのが。こうなった彼はあまり人の話を聞かない。よって説得が難しくなるのだが、通信相手の男はそれも見越している様だった。

『分かってる！　だから今はオレを信じてそいつらは無視しろ！お宝がこの星にあるのは分かってんだ、探せば絶対に見つかる。オメェさんだって雑魚の相手するよか、その方がいいだろ？』

謝罪から指示へと男の言葉が移行する。恐らく彼も本気なのだろう。だからこちらの納得云々の前に、目の前の目標だけは完遂させようとしている。男の様子からアスティルはなんとなくそれを感じ取った。

「……その情報、ほんっとに間違いはありんせんね？」

本気は伝わってもやはり素直に指示に従う気にはなれない。アスティルは最後に釘を刺すつもりでそう問い掛ける。その返答は十分過ぎる、予想以上のものだった。

『ああ、なんだったらネオグリード海賊団船長、アッドマン・タイトの名を賭けてもいいぜ』

不敵に答える通信相手こと、アッドマン。アスティルは知っていた、ネオグリードという存在が、彼にとってどれだけの”宝”であるかを。そして彼にとって”宝”を賭ける事が何を意味するかを。彼の言葉に先に折れたのはアスティルだった。

「……よござんす、今回は貸しイチで水に流しんしょ？」

通信機越しにアッドマンのため息が聞こえたところで、レバーを引くアスティル。彼の乗るグレーで統一されたＶＡが、音も光もなくその機体を傾けた。機体はそのまま人知れずにカタパルトへと進入していく。全身が入り込み、ハッチが閉まったところでアスティルは思いついたように呟いた。

「あ、そういえば船長が探してるお宝ってなんなんです？」

言われて初めて思い出したのだろう。アッドマンは『あー』と間延びした声で答える。その後もなかなか返事がないのは、名前を忘れたからだと言う事はアスティルにも容易に想像がついた。物の価値には人一倍敏感なのに、名前や来歴には全く興味を示さない。アッドマンはそういう男なのだ。しかし例えそうであっても、今回ばかりはアスティルも呆れを隠せなかった……。

『……あーアレだ、カルマリーヴァ。世間で”邪神”だなんだってぇ騒がれてる』

## 3―2

「……これも規格が一致してる」

最初は何かの間違いだと思った。”邪神”の中身を見たのは一瞬だけだったし、確かに雰囲気は近いが差異もまた大きい。奇妙な位置に長槍が取り付けられた腕、肥大した肩部、不自然に太く短い下半身……全てがいびつなソレは、本当に”邪神”であったとしてもＶＡとは別のモノであろうと、そう思おうとしていた。

だが、肩を覆う棘の様な無数の砲身、胸部のカメラアイを彷彿とさせる紅い銃口、そして全身に空いたいかにも霧でも散布できそうな排気口など、全ての武器が”邪神”のそれと一致している。そして、規格。例え違うパーツでも、規格には製作者のクセの様な物がどことなく出るのだそうだ。そして目の前の神体は外見こそ特殊だが、パーツひとつひとつはラグディアンやプラッテに流用可能な程、規格が一致していた。

そもそも、ＶＡ製造の技術は未だエスキナ教団にしかない。本来ならば軍などに技術提供を求められて然るべきだが、教団は秘匿としてこれを退けた。ＶＡの扱いはあくまで機動聖像である。その動力は神通力の類であるとされ、機械でこれを再現する事は不可能である、というのが表向きの理由だ。もっとも、騎士の間ではＶＡが機械であることは公然の秘密なのだけれど。しかしそういった事を考えると、どれだけ否定しても答えは自ずと見えてくる。

「やっぱり”邪神”も、教団が作ったＶＡだったんだ……！」

無意識に歯を食いしばっていた。心の底から少しずつ怒りが込み上げてくる。つまり今まで必死に戦ってきたのは単なる八百長だという事か？　それでどれだけの仲間が死んでいったというのだ、ふざけているにも程がある。どうして、一体何の為に……いや、どんな理由があったとしても納得など出来ないだろう。いっそこの場でコイツを破壊してしまおうか。そうすれば死んでいった仲間の無念も少しは晴れるのではないだろうか。そんな事を考えると、自然に拳へと力がこもった。しかし、

「っ！？　……通信器？」

諌めるようなタイミングでポケットから振動が起こる。もう既に戦いを始めているであろう騎士団からの連絡。そうだ、こんな事をしている場合じゃない。早くここを脱出して皆と合流しなくちゃならないんだ。僕は必死で怒りを抑えようと深呼吸をし、ポケットから通信器を取り出した。

「……こちらルエイユ・ゴード司祭」
『ルエイユか！？　お前今何処に居るんだよ！』

器を耳に当てるのとほぼ同時に、怒鳴っているに近い大きな声が聞こえてくる。慌てているのか名乗りを忘れているが、この声は恐らくラスティさんだろう。

「……ラスティさん。すみません、移動中に崩落に巻き込まれてしまって、現在脱出経路を探索中です」
『なんだって！？』

ラスティさんの驚いた声が聞こえ、直後に彼の声が遠くなった。どうやら受話器から顔を離したらしい。理不尽な怒りをぶつけない

ようにという配慮なのだと思うが、声が大きかった為に遠巻きながら『なにやってるんだよ、もう』という声が聞こえて来ていた。

『……わかった、だが急いでくれ。召集の目的は宇宙海賊の討伐なんだが、今回のヤツらはＶＡを使ってきてるんだ』

「ＶＡ……盗品ですか？」

再び受話器に近づいたと思われるラスティさんは意外な言葉を口にする。動力が神通力というのは無論口実作りのでまかせだから、動かせないという事はない。だが、そもそも製造できない物をどうやって手に入れた？　僕は一番可能性が高い説を挙げたつもりだが。

『ベースはそうみたいだ。だが、どれも射撃戦重視に改造が施されてる』

「それは、厄介ですね……」

確かに改造するだけなら造るよりは遥かに簡単だ。そして効果も高い。騎士の基本は白兵戦、というのはあくまで”邪神”対策であって、普通なら射撃の方が有利に決まっている。それでも普段は”邪神”としか戦わない騎士団は、ＶＡ戦においてもどうしても白兵戦からそうそう離れる事ができない。模擬戦の時も白兵戦を主眼に行うからだ。とどのつまり、射撃に慣れていない。

『ああ、団長とミルニアはうまい事立ち回れてるみたいなんだが、それ以外のヤツらはどうにも苦戦してる……なんとかこっちに来てくれよ、射撃戦はお前の得意分野だろ？』

「そんな事言われても……」

僕にできる事があるなら行きたいのはやまやまだが、まずはここから出なければ話にならない。その為の出口はさっき探したのだが、

結局それらしい物は見つからなかった。

「良く分からないけど、何故かこの部屋はハッチしかないんですよ」

『ハッチしかない部屋って……噂のＶＡ格納庫か！？』

そんな噂は聞いた事がない。が、ラスティさんが言うからには恐らくあるのだろう。一瞬貴重な情報なのかと思い、身構えてしまう。しかし、どうやら逆だったようだ。特になにか求められる訳でもなく、ラスティさんは話を続ける。

『他区画からは何処ともアクセスしてなくて惑星外部からしか入れないっていう、開発中の秘匿ＶＡを隠しているって噂の区画があるらしいんだ。眉唾な話だから人に売ってはいない情報だけどな』

「なるほど、秘匿ＶＡ……」

確かに、あった。今目の前にそびえている漆黒のＶＡなどまさに秘匿中の秘匿だろう。もっとも、その神体は開発中どころかずっと昔から戦い続けている相手だったのだが。しかし、そんな事とも知らずにラスティさんは『あるんだな』と確認をしてきた。

『だったらなんでも良い、借りて来い。さっきも言ったが、そこは多分出口がハッチしかないんだ。宇宙服か神体がないと外には出られないと思う。で、ついでにそれで戦ってくれよ。プラッテだけだと結構厳しいんだ』

「そんな……」

『お、補給が終わったみたいだ。じゃあ俺は前線に戻るから、お前も早く来いよ』

無茶な、まで僕が言い切るより早くそれだけ言うと、通信は一方的に切られてしまう。非常時とは言え、流石に無理な事を言ってく

れたものだ。神体とは誰でも乗れるという物ではない。構造の秘匿もあるし、心ない人間が乗れば心強い神の加護もただの暴力となる。神体は予め騎士の登録がなされ、それ以外の人間に乗る事は出来ないのだ。当然、ここにある神体に僕の事が登録されているはずもなく……

「……待てよ？」

考えの途中でふと思い当たる事があり、ポケットを探る。出てきたのは一枚のカード。先程ハルコ様から借り受けた物だ。確かマスターキーだと言っていなかっただろうか。なら、恐らくこの神体を動かす事も可能だろう。一瞬、頭の中でこれに乗って援護に向かおうかとも考える。”邪神”の強さは誰もが知っての通りだ。あれだけの性能があれば、僕程度の腕でも十分戦力として活躍する事は出来るだろう。しかし、

「……いや、駄目だ」

仮にこれで支援したとして、他の騎士達はどう思うだろう。一応”邪神”は常に黒い霧の様な粒子に覆われ、その姿を見る事は出来ない。ＶＡとしての外観を知っている騎士は僕だけだとは思う。だが、その武装を見て”邪神”だと気付く者も出てくるのではないだろうか。そうなれば僕は味方から攻撃されるかもしれないし、下手をすれば教団も潰れかねない。教団がしてきた事は疑いようもなく信者達に対する裏切り行為だ。事が露見すればきっと暴動が起こる。そうなったら今度は何人の騎士が犠牲になる事か。

「でも、だとしたらどうやって……！？」

再び大きな揺れが起こる。と、言ってもここは随分頑丈なつくり

の様だ。天井に当たる部分が揺れているだけで、格納庫内には傷一つ出来ない。この場所に居れば、恐らく怪我をしなくて済むだろう。どんな襲撃があっても、少なくとも僕は助かる。その事実が、なんとなく僕を不快な気分にさせた。

「護るための騎士が、安全な場所にぬくぬくしていてどうするんだ」

苛立ちを込めて呟く。そう思ってからの行動は早かった。すぐさま”邪神”に駆け寄り、コックピットから垂れている昇降式のワイヤーにつかまる。それを軽く引くと、ワイヤーが縮み僕を神体の胸部へと導いた。

「!?　ゲホッ、ゲホッ……」

到着すると同時に思わずむせてしまう。コックピットの中は驚く程埃まみれだった。全体的に白くもやが掛かったような外観になり、使用感といった物が一切ない。これは本当に誰かが乗っていたのかと疑いたくなる。僕は口元を押さえつつもう片方の手で埃を払った。

『マスターキー認証』

とりあえず機械周りだけ掃除したところでカードを読み込ませる。よかった、どうやら機能自体は生きているらしい。環境は酷いものだが、動かせるだけ幾分マシだ。シートの埃を簡単に払うと僕はそこに座ってレバーを握る。モニターを見る頃には既に閉じていたハッチの向こうに宇宙空間が見えていた。神体の機動と同時にハッチが開く仕様になっているのだろうか。少数でも発進が行える為の配慮なのかもしれない。今となっては都合の良い話だ、利用させてもらおう。僕は足元のペダルに軽く足をかけた。

「システムオールグリーン、メインブースター点火……発進！」

動ける事を確認し、ＡＩに指示を出しながらペダルを踏みしめる。神体が大きく揺れ、どうやら発進が成功した事が分かった。しかし、

「――――ッ！？」

全身に何とも言えない苦しさが走る。胃を逆流する吐き気、息を吸う事の叶わない肺。押し潰される様な圧迫感に、僕の視界は白く染まっていった……。

## 3－3

「……ガハッ！　ゲホッ、ゲホッ……オエェェエ……」

頭に走る衝撃で意識が強制的に呼び戻される。覚醒と同時に肺が空気を求めているのが分かった。横隔膜が勝手に動き、埃っぽい空気を思い切り押し込む。結果咳き込んで更に空気を失う事になり、凄まじい嘔吐感に襲われる事となった。

「フゥー、フゥー……何が起こったんだ」

なんとか口元を押さえながら呼吸を整える。幸い実際に吐いては居なかったらしい。吐瀉物による汚れはなかった。中の無事を確認したら次は外だ、急いでモニターに目を移すと周囲に既に壁はなく、果てのない闇はそこが宇宙空間だと言うことを教えてくれた。どうやら発進は無事成功したようだ。では、一体なぜこんな事になっているのか。僕にはひとつだけ心当たりがあった。それはGだ。あの内臓が圧迫される感覚は対G訓練で味わう物に似ている。無論、その規模は訓練の比ではなかったが。あの訓練は人によってはかなり厳しい物らしく、中には訓練中に意識を失う騎士もいるのだという。恐らく、僕もその状態になったのではないだろうか。そして、何かにぶつかってやっと止まったと……

「……馬鹿げてる」

最早そんな言葉しか出てこなかった。対G能力は僕の取り柄と言っても過言ではない。訓練ではいつも1、2を争う好成績を収めていた。これは相対的な結果に基づく物なので自惚れではない……と思う。その僕が意識を保てない程の強力なG。初めての使用で油断

していたという事を加味しても、とてもまともな感性で扱えるとは思えない。

「まったく、ぶつかってなければ何処まで行っていたんだ……そうだ、何にぶつかったんだ!?」

慌ててレーダーを確認する。デブリにぶつかった程度なら良いが、他の騎士のＶＡなどだったら洒落にならない。ただでさえ今乗っているのは所属不明機という事になるのだ。迂闊な行動を取っては敵とみなされてしまう。反応を調べると、ぶつかった物からはエネルギー反応が出ていた。加えて言えばそれは微妙に動き回っていて、姿勢制御を行っている事が見て取れる。どうやら本当にぶつかったのはＶＡのようだ。しかし、熱量などがプラッテとは微妙に違うのはどういう事だろう。騎士に支給されている神体は今のところプラッテしかないのに。

「まさか、海賊の？」

そこでラスティさんの言葉を思い出す。そうだ、敵はＶＡを使っていると言っていた。それを思い出し、改めてＶＡを見て驚いた。よく見れば確かに妙な継ぎ目が多い。恐らく盗品を無理やり組み合わせた物なのだろう。だが、それでここまでしっかりと動くように修理出来るとは。どうやら敵の技術力は予想以上に高いらしい。その証拠に、あれだけの勢いでカルマリーヴァ程の巨体がぶつかったというのに、そのＶＡは姿勢を戻すと戦闘態勢を取り始めたのだ。あれでもまだ壊れていないという事か。

「来る……メーザー砲用意！」

僕の声に反応してカルマリーヴァが敵ＶＡに向かって手をかざす。

メーザー砲の銃口は掌にあるのだ。搭乗時に確認した事だが、この神体には外付けの武装という物がない。膨大な数の武装が全て内蔵されていて、その分サイズもプラッテの１５Ｍに対し、２５Ｍと倍近く大きい。このサイズならば当然掌もかなりの大きさだ、きっと敵のレールガンに威力負けする事はあるまい。

「照準合わせ、発射！」

こちらが構えたのに気付き攻撃を開始したＶＡに、こちらも負けじと砲撃する。本当なら回避もしておきたいところだが、この神体のブースターを迂闊に使うのは危険だ。戦闘中に気絶しては洒落にならない。不本意だが数発程度は甘んじて受けるとしよう。そう思っていたのだが実際は違った。こちらには砲撃の反動しかなく、彼岸にはエンジンと思われる部分から火を噴く敵機の姿。

「なっ！？　レールガンを無効化しつつ敵機を大破させた……馬鹿な！　相手はレールガンを二門装備していたのに！」

敵の姿を見てラスティさんの言葉を実感していた。プラッテに良く似たその機体の最もそれと違う点は、両手にレールガンが装備されていた事。手段としては単純だが、火力を上げるには最も手っ取り早い。そうして底上げされた火力を相殺し、なお敵を破壊して見せたのだ、この神体は。一体この武装一つにどれだけエネルギーを使うつもりなのか。

「……エネルギー残量は！？」

咄嗟に神体を一時停止させ、確認をする。馬鹿げた機動力に馬鹿げた火力、これではいくら強力なジェネレーターを使ってもエネルギーが保たない。先のハルコ様との模擬戦は、それが原因で敗れて

いるのだ。なおさら気になって当然と言うべき状態だった。しかし、

『ＥＲＲＯＲ．質問の意味が分かりません』

今まで確実だった音声入力がまさかのエラー。機能不全かと思い何度か同じ質問を、微妙に言い回しを変えつつしてみたが、どうしてもこの質問に答えない。これだけ言っても反応しないという事は、恐らくこのＡＩにはこの類の質問が本当に登録されていないのだろう。だが、一体どうして？　戦闘を行えば、当然の如く確認しなければいけない事なのに。こんな事では配備などできようはずもない。いや、そもそもこれは人が乗る前提で作られているのだろうか？　埃まみれのコックピットを見ると、それすらも怪しい。だが、誰も乗っていないとしたら普段戦っている”邪神”は一体。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8586x/

メサイア・デザイア

2011年12月13日02時48分発行